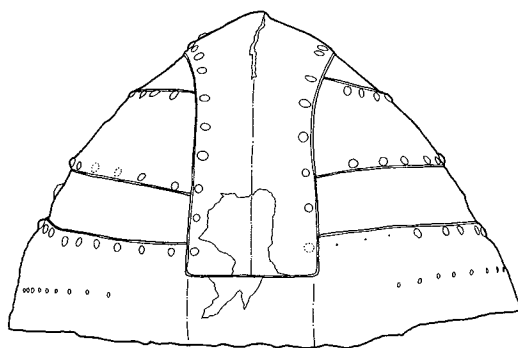


# 上田蝦夷森古墳群 太田蝦夷森古墳群

—— 発掘調査報告書 ——



1997. 3.

盛岡市教育委員会

上田蝦夷森古墳群  
太田蝦夷森古墳群

—— 発掘調査報告書 ——

1997. 3.

盛岡市教育委員会

# 序 言

盛岡市には、縄文時代から江戸時代にいたる、数多くの埋蔵文化財が存在します。私どもは、この貴重な埋蔵文化財を後世に伝えるため、さまざまな開発事業との調整を図りながら、発掘調査を進めております。上田蝦夷森古墳群は、こうした発掘調査が実施されて初めてその存在が明らかになりました。この小さな古墳から出土した衝角付冑は日本最北の出土例です。他の副葬品もあわせて、蝦夷と呼ばれた古代北東北の人々の活動を知る貴重な手がかりとして注目され、平成6年には古墳からの出土遺物が一括して岩手県文化財に指定されました。

また、本書には太田蝦夷森古墳群の調査成果も収録しております。あわせて御活用いただけますれば幸いです。

最後になりましたが、本書をまとめるにあたり、御指導・御協力をいただきました、文化庁記念物課、東京国立博物館、岩手県教育委員会、岩手県立博物館をはじめ、関係の皆様方に厚く御礼申し上げます、刊行のご挨拶といたします。

平成9年3月

盛岡市教育委員会

教育長 佐々木 初朗

# 例 言

1. 本書は平成元年度に実施した、上田蝦夷森古墳群第1号墳の発掘調査成果、及び、昭和30年に小岩末治氏、昭和44年・45年に岩手大学により実施された、盛岡市上太田の太田蝦夷森古墳群の調査成果を収録した発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆編集は、盛岡市教育委員会文化課 室野秀文、八木光則、似内啓邦、藤岡光男、菊池与志和、津嶋知弘、三浦陽一、神原雄一郎、黒須康之、太田代由美子があたった。
3. 遺構の平面位置と高さは、上田蝦夷森古墳群の平面は公共座標第X系を変換して表示し、高さは標高値で示した。太田蝦夷森古墳群は当時の調査記録を参照して遺跡地形図中に位置を示し、高さは任意の表示とした。
4. 土層図は堆積の仕方を重視し、線の太さを使い分けた。土層註記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては、『新版標準土色帖』（1967 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。
5. 発掘調査の出土遺物・諸記録は盛岡市教育委員会で保管している。
6. 調査中及び報告書作成にあたり、次の方々より御指導、御助言、御協力を賜った。記して深謝申し上げる。（順不同敬称略：所属は調査当時）

東京国立博物館	村井 崑雄	立正大学文学部	坂詰 秀一
岩手大学	佐々木博康	福島大学行政社会学部	工藤 雅樹
岩手県教育委員会	相原 康二		
岩手県立博物館	高橋 信雄	熊谷 常正	赤沼 英男
久慈琥珀博物館	佐々木和久	水沢市教育委員会	伊藤 博幸
矢巾町教育委員会	西野 修	八戸市教育委員会	宇部 則保
近つ飛鳥博物館	三宅 正浩	石川県埋蔵文化財センター	小島 芳孝

# 目 次

序 言	
例 言	
目 次	
I 環 境	1
1 地形と地質	1
2 歴史的環境	2
II 上田蝦夷森古墳群の調査	5
1 調査の経過	5
2 調査の成果	8
3 調査のまとめ	12
III 太田蝦夷森古墳群の調査概要	14
1 古墳群の現況と過去の調査	14
2 調査の概要	15
3 調査のまとめ	28
IV 上田蝦夷森古墳出土鉄器の金属考古学的調査結果	29

# 図 版 目 次

第1図版	上田蝦夷森古墳群全景
第2図版	上田蝦夷森古墳群第1号墳
第3図版	遺物出土状況と出土土器
第4図版	衝角付冑
第5図版	刀子・環状錫製品・琥珀原石
第6図版	太田蝦夷森古墳群第1号墳
第7図版	太田蝦夷森古墳群第1号墳
第8図版	第2号墳
第9図版	第3号墳・第4号墳
第10図版	第5号墳・第6号墳・刀剣

# 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	7・8世紀の主要遺跡	3
第3図	上田蝦夷森古墳群旧地形図	4
第4図	上田蝦夷森古墳群周辺地形図	6
第5図	上田蝦夷森古墳群調査区全体図	7
第6図	第1号墳実測図	9
第7図	第1号墳出土遺物実測図(1)	10
第8図	第1号墳出土遺物実測図(2)	11
第9図	第1号墳平面模式図	13
第10図	太田蝦夷森古墳群地形図	14
第11図	小岩古墳	16
第12図	第1号墳地形図	16
第13図	第1号墳実測図	17
第14図	太田蝦夷森古墳群出土土器・金属製品	19
第15図	太田蝦夷森古墳群出土刀剣類	21
第16図	第2号墳出土小玉計測グラフ	22
第17図	第2号墳出土玉類実測図(1)	23
第18図	第2号墳出土玉類実測図(2)	24
第19図	第2号墳出土玉類実測図(3)	25
第20図	衝角付冑の外観とX線透過写真像	30
第21図	衝角付冑から摘出した資料片の組織観察結果	31
第22図	刀子の外観とX線透過写真像	31
第23図	衝角付冑に含有されるCu, Ni, Co, 三成分比	35
第24図	摘出した資料片に含有される元素濃度分布	36

# 表 目 次

第1表	太田蝦夷森古墳群第2号墳・第3号墳出土遺物	19
第2表	太田蝦夷森古墳群第2号墳玉類計測表	25~28
第3表	鉄製品調査資料	33
第4表	衝角付冑分析結果	34
第5表	古墳出土鉄器の化学組成	34

# I. 環 境

## 1. 地形と地質

岩手県・秋田県の県境と重なる奥羽山脈と、岩手県の三陸沿岸部と内陸部を分ける北上山地との間には、広大な北上盆地が形成される。中央を流れる北上川は、岩手町御堂を水源とし、南に流れくんだり、約249kmで宮城県北上町で太平洋に達する大河である。盆地の北部に位置する盛岡市は、人口28万8千余人の都市であり、岩手県の県庁所在地である。藩政時代以来、市街地は北上川、雫石川、中津川の合流点周辺の、砂礫段丘Ⅲ（低位段丘）の面を中心に形成されている。市街地北部から北の地域は、北上川両岸に氾濫原は発達せず、丘陵地や扇状地、中位段丘が、東西両岸に迫っている。これに対し市街地周辺から南側にかけては、雫石川、中津川の合流により、水量が一気に増加して川幅が広がる。北上川は主に盆地の東寄りを流れ、これによって川の西岸地域には、緩やかな扇状地や低位段丘、氾濫原が広く形成されている。



第1図 遺跡位置図

上田蝦夷森古墳群は、盛岡市の北郊、北上川東岸の黒石野一丁目にあり、四十四田丘陵（丘陵地Ⅰ）の大森山（271m）や黒石山（262m）から派生する、丘陵尾根の裾部に位置する。この付近は北上川近くまで火山灰砂台地が迫り出しており、台地の上面には、東方の丘陵地からの湧水でいくつもの沢が開析されている。このために台地上面は、丘陵尾根の裾から続く舌状の小台地に分かれており、全体として起伏の多い地形となっている。

北上川の対岸、雫石川以北の厨川地域は、岩手山の火山噴出物で形成される滝沢台地が発達している。これより南西部の地域は砂礫段丘Ⅱ面が広がり、より下位となる雫石川近くは砂礫段丘Ⅲとなる。北西部は岩手山に続く沼森山地である。

太田蝦夷森古墳群の存在する太田地区は、雫石川の堆積物による平坦地や微高地が広がる。対岸の前潟、大釜地区の砂礫段丘Ⅲと同一面であり、雫石川の旧河道で樹枝状に開析され、東西に長い帯状の微高地が形成されている。南西側は雫石盆地と北上盆地を分ける箱ヶ森（866m）、南昌山（848m）の山塊であり、山麓部には丘陵地や扇状地が形成される。

## 2. 歴史的環境

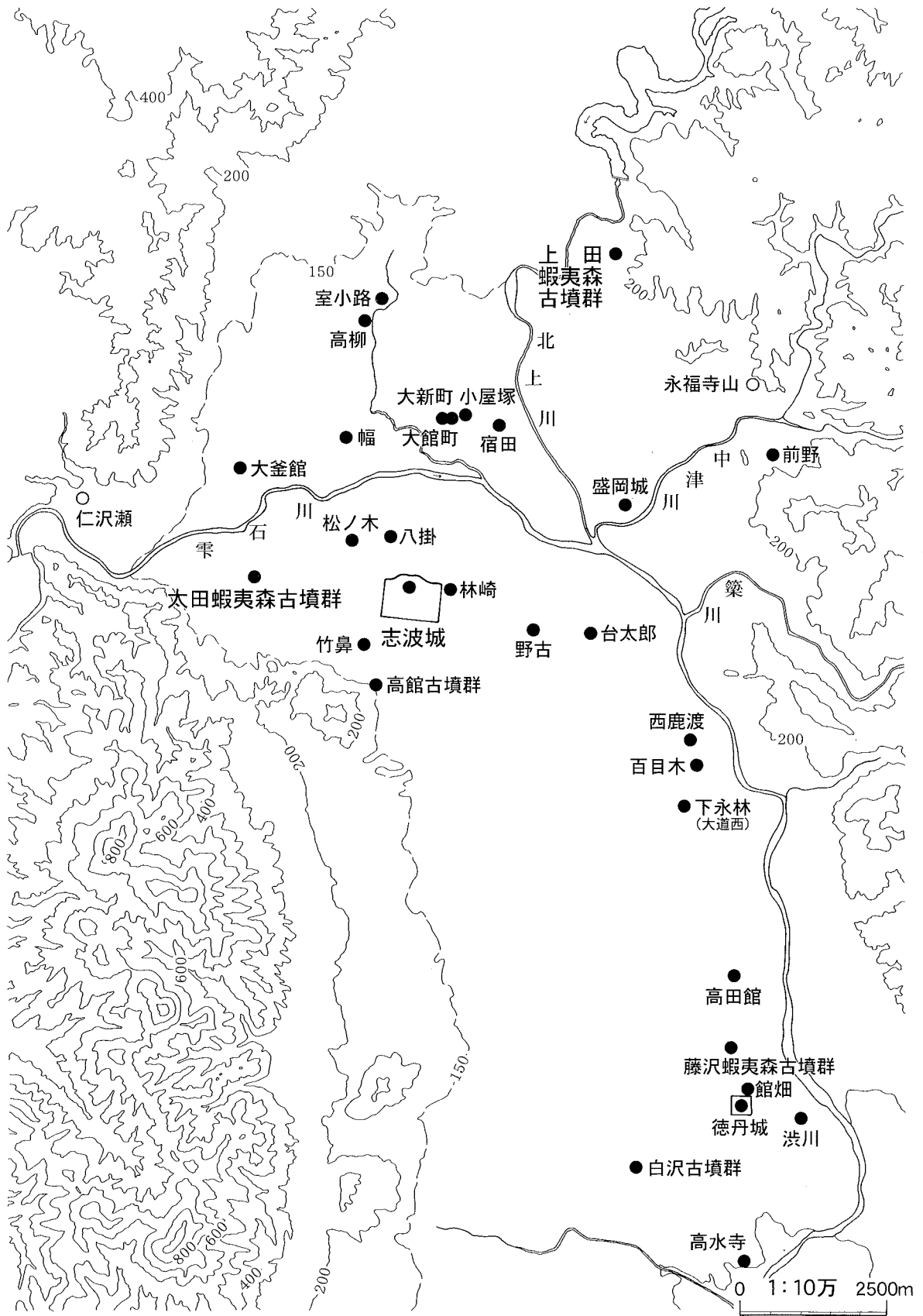
### （1）7～8世紀の遺跡と古墳

盛岡周辺地域において終末期古墳群が築造される以前、4世紀～6世紀の時代の内容は明確でない。このころの遺跡は僅かであり、北海道系の後北C2式土器等が散見される程度である。盛岡市下米内字寺並の永福寺山遺跡では、中津川北岸の丘陵先端部に4世紀ごろの墓坑群が発見された(1)。この遺跡では後北C2式土器と丹塗りの古式土師器（塩釜式）が共伴する。他に鉄製刀子、鎌、瑪瑙の勾玉、アメリカ式石鏃などが出土している。しかし、集落は全く不明である。また前九年の宿田遺跡からは、5世紀の北大Ⅰ式土器を出土した長方形土坑がある(2)。

7世紀に入ると、北上川以西のいくつかの遺跡で竪穴住居跡が確認されている。滝沢村高柳遺跡、盛岡市厨川地区の大館町遺跡、同三本柳の西鹿渡遺跡などである。高柳・大館町遺跡は滝沢台地の縁辺部に、西鹿渡遺跡は北上川に近い低位段丘上に立地する。いずれも7世紀中葉から後半にかけての遺跡で、高柳遺跡では在地の土器群と北大Ⅲ式土器の甕が共伴している(3)。8世紀の遺跡は滝沢村高柳遺跡、盛岡市の小屋塚遺跡、大新町遺跡、大館町遺跡、幅遺跡、志波城跡、台太郎遺跡、野古遺跡、西鹿渡遺跡、百目木遺跡、矢巾町徳丹城跡、渋川遺跡、高田館遺跡で集落遺跡が調査されている。台地上の集落もあるが、河川に近い平野部の微高地や、低い段丘上に進出した集落が多い。このうち、比較的まとまった範囲を調査しているのが百目木遺跡で、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡80棟が調査されている。このうち、奈良時代（8世紀）の集落では、大型の竪穴住居を小型の竪穴住居が従属するように囲むグループが認められる(3)。

岩手県における高塚古墳は、胆沢郡胆沢町の前方後円墳角塚古墳（国指定史跡）のみであり、外は北上市の江釣子古墳群に代表される、径5m～12m程度の規模をもつ小規模な円墳である。いわゆる高塚古墳と異なり、主体部の掘込みが、墳丘基底面より深い場合が少なくない。

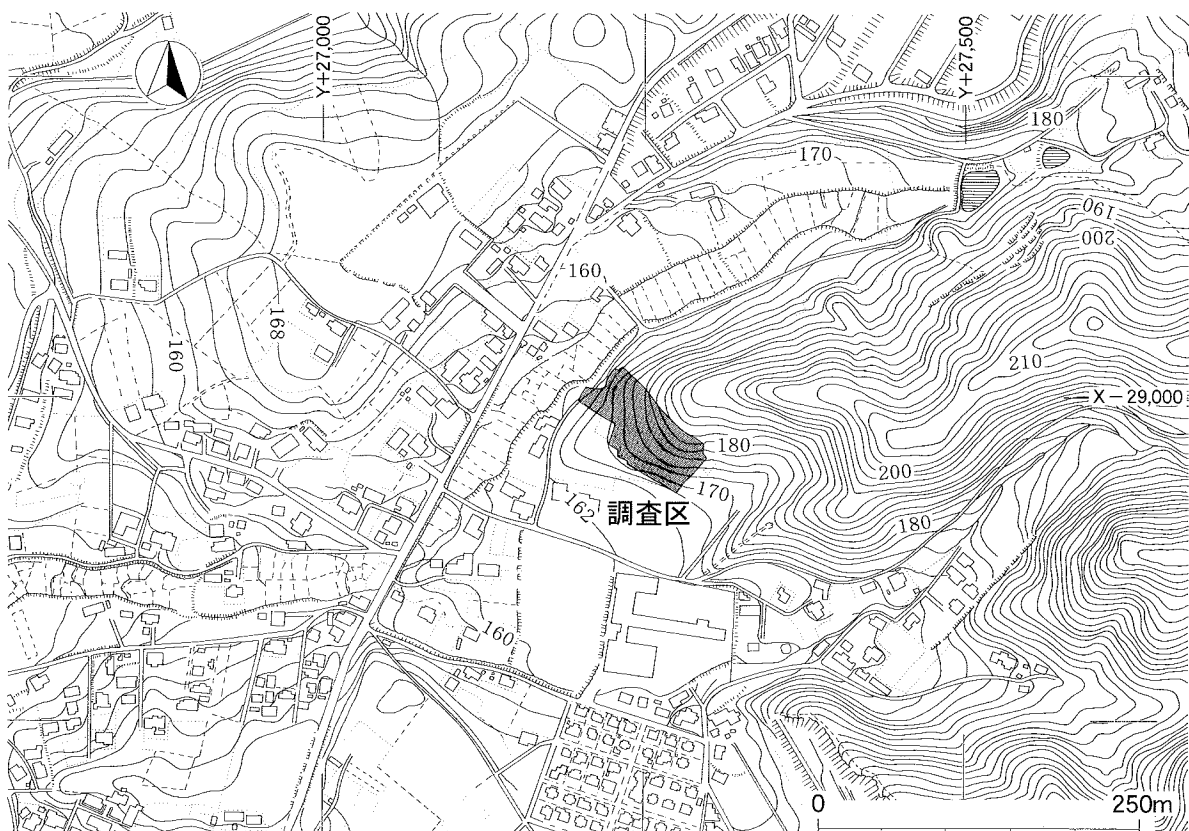




第2図 7・8世紀の主要遺跡

したがって墳丘が完全に削平された場合でも、主体部と周隍の残存により、古墳の存在が容易に確認できる場合が多い。7～8世紀の終末期古墳群は、盛岡市の上田蝦夷森古墳群のほか、同市太田蝦夷森古墳群、高館古墳群、矢巾町藤沢狄森古墳群、白沢古墳群が存在する。このうち上田蝦夷森古墳群、高館古墳群は山麓部の小台地に立地するが、その他は平野部の微高地や低位段丘上に立地する。7世紀代の古墳は、上田蝦夷森古墳群、藤沢蝦夷森古墳群で確認され、どちらも主体部は長方形の土坑タイプである。盛岡市の宿田遺跡では、灰白色火山灰の堆積する円形周隍（9世紀代？）が複数確認されている。8世紀の太田蝦夷森古墳群では、これまでに川原石積みの主体部をもつ古墳が7基確認されている。同種の古墳としては、太平洋側では北限である。また、雫石川北岸の微高地にある滝沢村大釜館遺跡からは、9世紀前半の土器を出土する円形周隍5基が集中して検出された(6)。こうした主体部の不明確な周隍は、主体部が墳丘中に存在する墳墓である可能性があり(7)、今後の調査研究の進展が期待される。

- (1) 盛岡市教育委員会（1997）『永福寺山遺跡』
- (2) 盛岡市教育委員会調査（未報告）
- (3) 滝沢村教育委員会（1987）『高柳遺跡』
- (4) 都南村教育委員会（1979）『百目木遺跡』
- (5) (2)に同じ
- (6) 滝沢村教育委員会（1995）『大釜館遺跡現地説明会資料』
- (7) 玉川英喜（1990）「岩手県内の円形周溝と方形周溝」『紀要X』（財）岩手県埋蔵文化財センター



第3図 上田蝦夷森古墳群旧地形図（1969年）

## Ⅱ．上田蝦夷森古墳群の調査

### 1．調査の経過

昭和62年土地所有者より、東黒石野遺跡内を店舗に伴う駐車場用地として造成したい旨の事前協議があり、発掘届が提出された。これにもとづいて、盛岡市教育委員会が試掘調査を実施した結果、用地内の全面から縄文時代土坑群が検出され、工事着手前の緊急発掘調査が必要となった。平成元年4月より、盛岡市教育委員会が調査主体となり、事業主負担により本調査が実施された。調査範囲は開発予定面積の全体（5,877㎡）で、全面表土除去した結果、縄文時代土坑76基、縄文時代中期竪穴式住居跡1棟、古墳1基が検出された。古墳については全く予想外の成果であったが、調査区外の地形や遺物の散布状況から、調査区南西側にも古墳の存在が予測された。このため当初の東黒石野遺跡とは別に、遺跡南方の上田一里塚（岩手県指定史跡）付近にある地名「蝦夷森」を採って、上田蝦夷森古墳群と命名した。

#### 1 調査遺跡名

上田蝦夷森古墳群（東黒石野遺跡）

#### 2 調査地の所在地

盛岡市東黒石野一丁目27－36

#### 3 調査原因

店舗駐車場造成

#### 4 調査期間 平成元年4月13日から同年6月18日

#### 5 調査体制（調査当時）

調査体制 盛岡市教育委員会

教 育 長 佐々木初朗

教 育 次 長 水本 光夫

社会教育課長 川村 滋

課 長 補 佐 山田 正誼

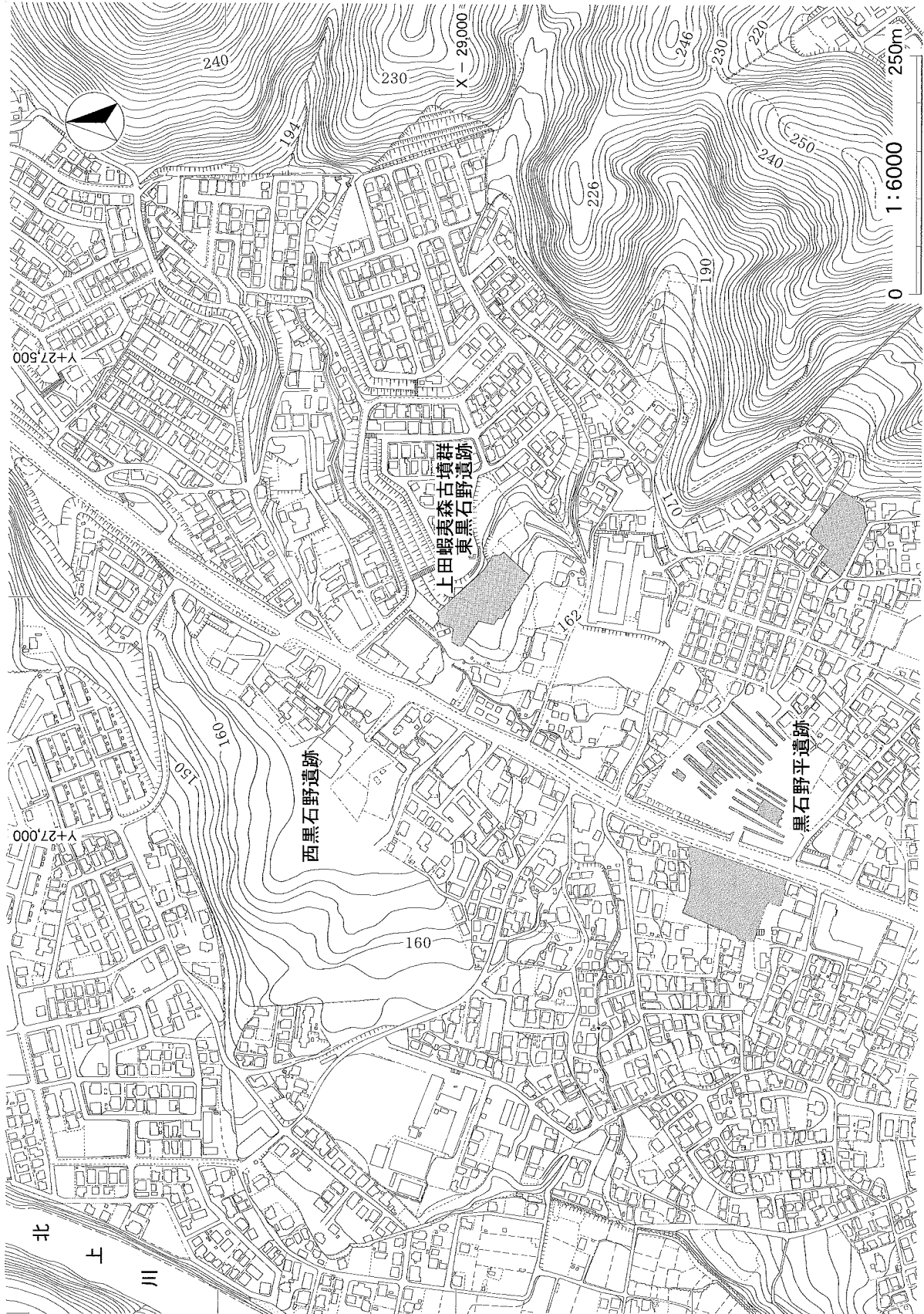
文 化 係 長 菅原 康一

主 査 八木 光則 千田 和文

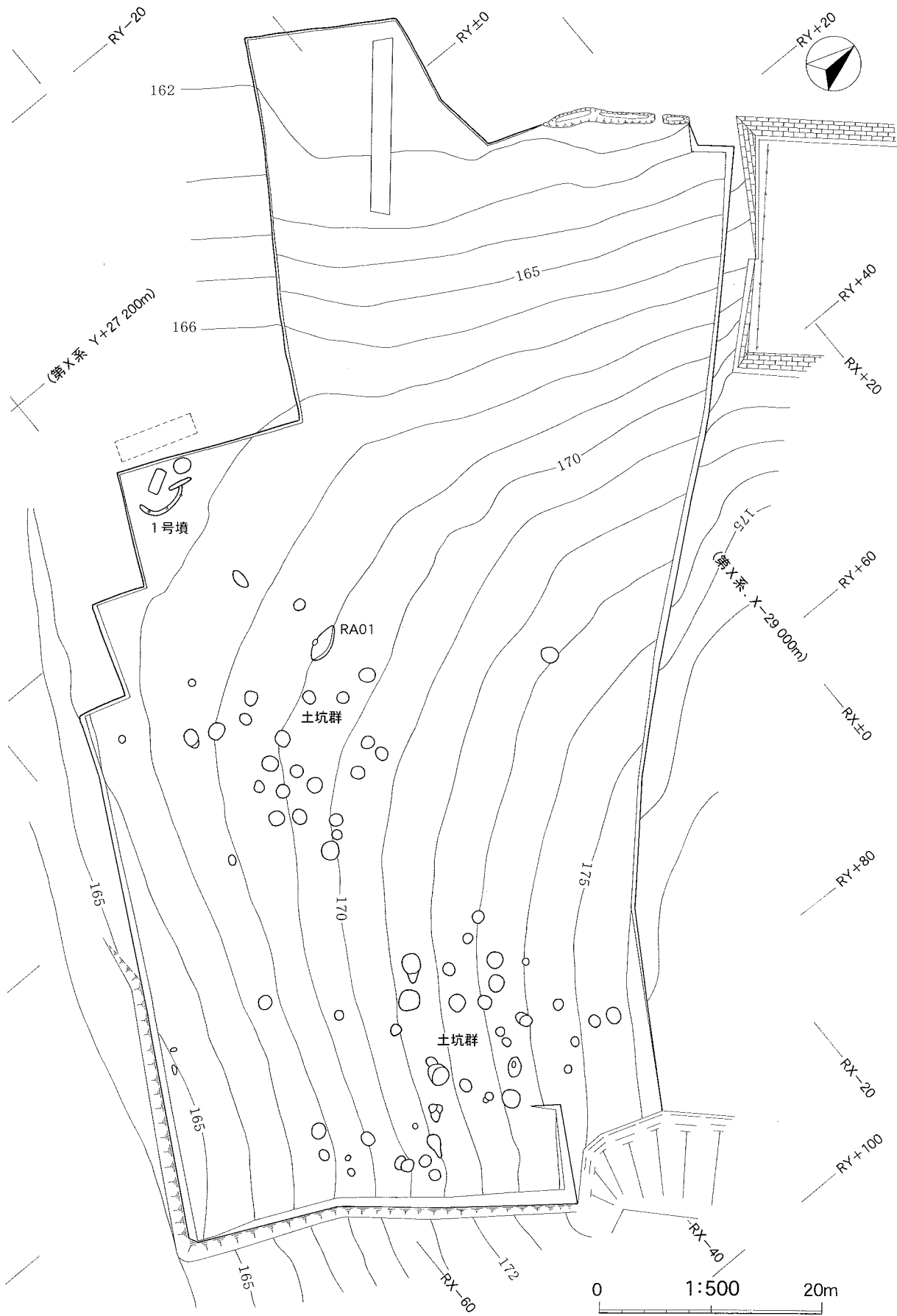
主 事 似内 啓邦 小原 俊巳 原田 秀文

斉藤 信次（調査担当）

調査協力 川村 登 佐々木一男 佐々木 忠



第4図 上田蝦夷森古墳群周辺地形図



第5図 上田蝦夷森古墳群調査区全体図

## 2. 調査の成果

### 遺構検出状況

発掘調査は丘陵の南西側斜面を中心に実施された。黒褐色～暗褐色の表土は30cmから60cmの厚さがあり、これを除去すると地山の黄褐色土が全面にわたって露呈した。試掘調査段階では縄文時代土坑群が確認されていたが、調査区南西角から古墳（第1号墳）が1基検出された。中央部から東部の南向き斜面からは、縄文時代中期竪穴住居跡1棟のほか、土坑76基が検出された。調査区西部の西向斜面からは、遺構・遺物の検出は皆無であった。

### 第1号墳（第6図～第9図）

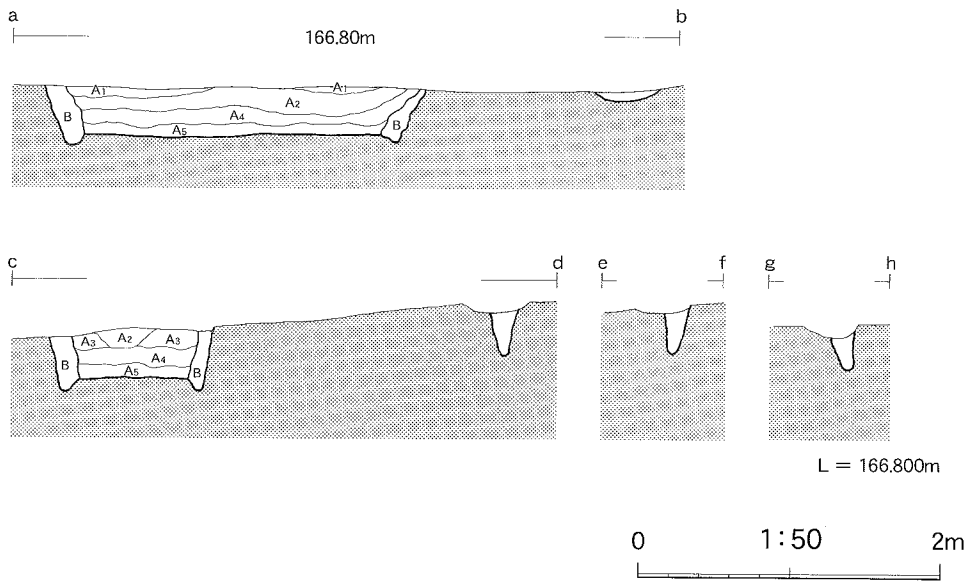
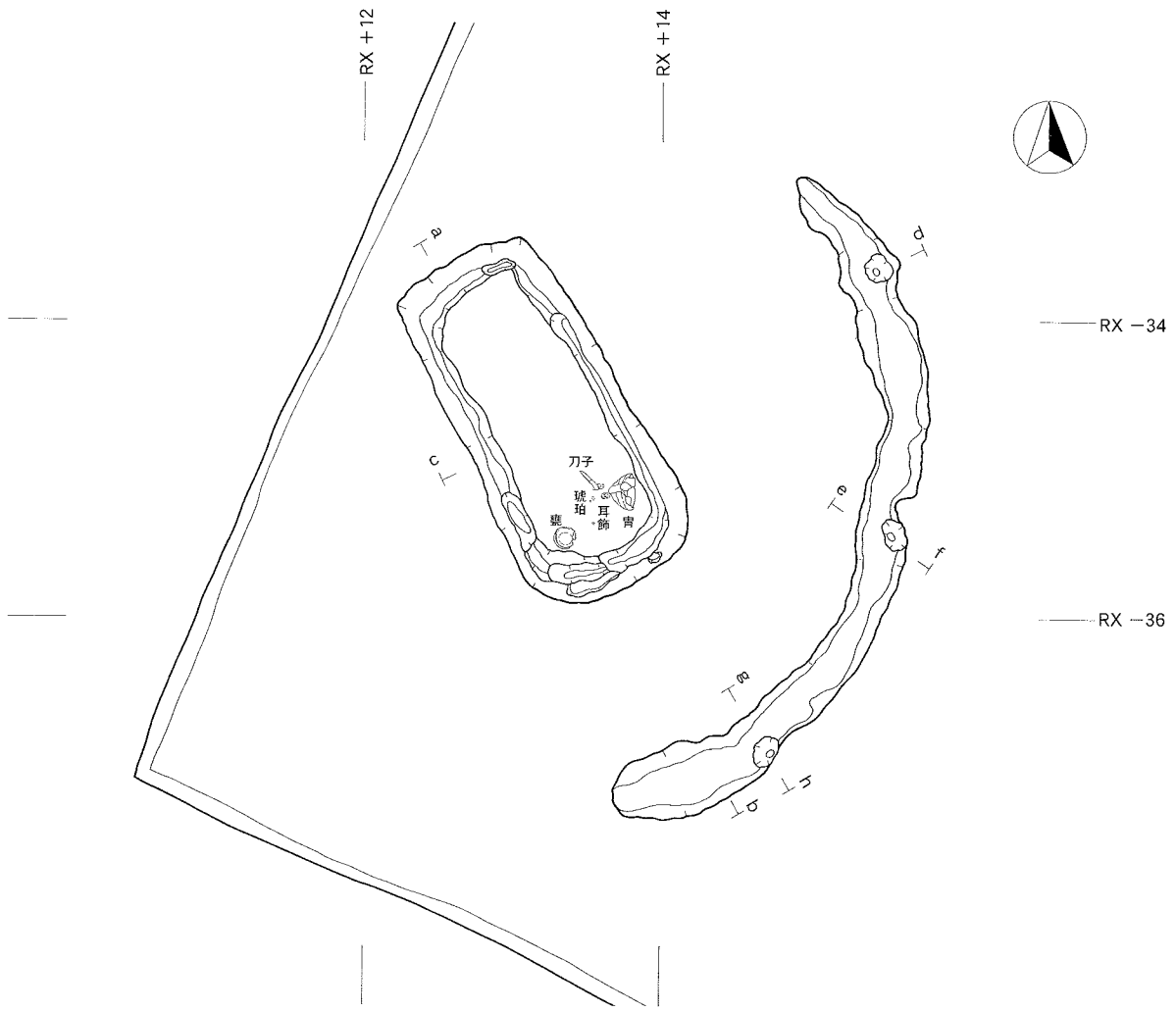
調査区の南西隅に検出された。墳丘は既に完全に削平されており、主体部の墓坑と周隍東側の一部長さ約5.6mほどが残存している。円周の状況から、墳丘基底部の直径はおよそ4.8mに復元される。周隍の規模は幅25cm～50cm、深さは5cm～10cmを測り、埋土は黒褐土主体で自然堆積である。周隍外壁に添って3つの小柱穴が存在する。柱穴の間隔は芯々でP1～P2は1.84m、P2～P3が1.69mである。柱穴の径は8cm内外、深さ25cm～30cmで、穴の底部は細くなっている。埋土は黒褐色土主体で褐色土が少量混入する。

主体部の土坑は隅丸長方形のプランで、主軸はS28°Eを示す。規模は長軸で2.5m、幅は0m～1.25mで南側がやや広く、深さ32cmを測る。壁は長軸方向でやや外傾しており、短軸方向では概ね直立する。壁面は凹凸が少なく、比較的整っている。壁の直下には、幅10cm～15cm、深さ5cm～15cmの溝が全周する。土層断面には、木の割材か板のようなものが、土留のように立てられていた痕跡（B層）が認められる。底面は平坦で硬くしっかりとしている。主体部の埋土はすべて人為堆積の様相を呈するが、墳丘が残存しないため、この内部に直接堆積したものか、墳丘の盛土が落下したものかは、直接的には判別できない。A1層は黒褐色土主体で、褐色土が混入する。A2層は鈍い黄橙色土と明黄褐色土のブロック状混合土、A3層～A5層は暗褐色土を基本とし、褐色土ブロックや褐色土粒が混入する。壁際のB層は暗褐色土主体で褐色土が少量混入する。なお、被葬者の遺体や骨片などは検出できなかった。

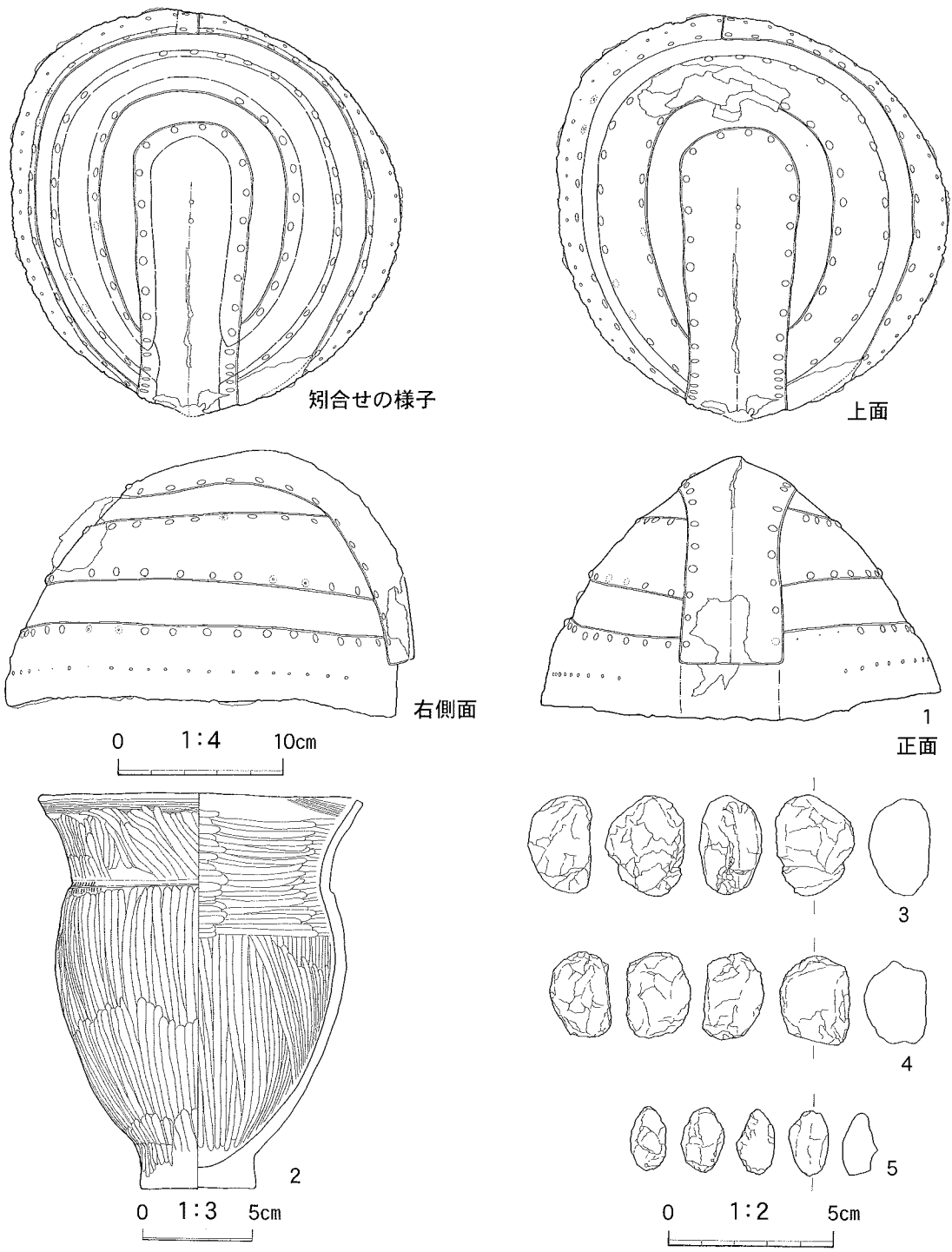
出土遺物はすべて主体部からの出土で、周隍からは出土していない。図示したものは主体部南寄りの底面からまとまって出土した。その配置は南西隅に第8図2の土師器甕が正立で置かれ、1の甕は南東隅近くに、正面を上、下面を外側に向け、横転した状態で出土した。この甕と土師器甕の間には、6の刀子、7・8の環状錫製品（耳飾？）2組、3～5の琥珀原石3個が置かれ、刀子は切先を北に向けていた。また、東側の壁溝からは、ロクロ未使用で内面黒色処理の土師器杯の体部小破片が1片出土している。

第8図の2は土師器の小型甕である。口径14.8cm、底径5.8cm、器高17.9cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外反し、頸部外面に段があり、胴部下半部は底部に向けてすぼまる。底部外面下端はわずかに外に張出し、底部内面は狭く丸くなっている。胎土は細かく、焼成は良好である。器面調整は口縁部外面が横方向のナデ、頸部から胴部にかけては縦の刷毛目のあと、丁寧に縦方向にヘラミガキされている。口縁部内面には斜め方向の刷毛目、胴部内面には縦のヘラミガキのあと、頸部の内面を中心に横方向にヘラミガキされている。土器の特徴から7世紀前半～中葉の年代であろう。

1は鉄製横矧板鋌留衝角付甕である。鉢部のみで鋳や三尾鉄は残存しない。大きさは前後の径24.8cm、左右の径24.2cm、高さ16.0cmである。横矧板鋌留式で、幅4.5cm～5.0cm、厚さ約1mm～2mmの帯状の鉄板を



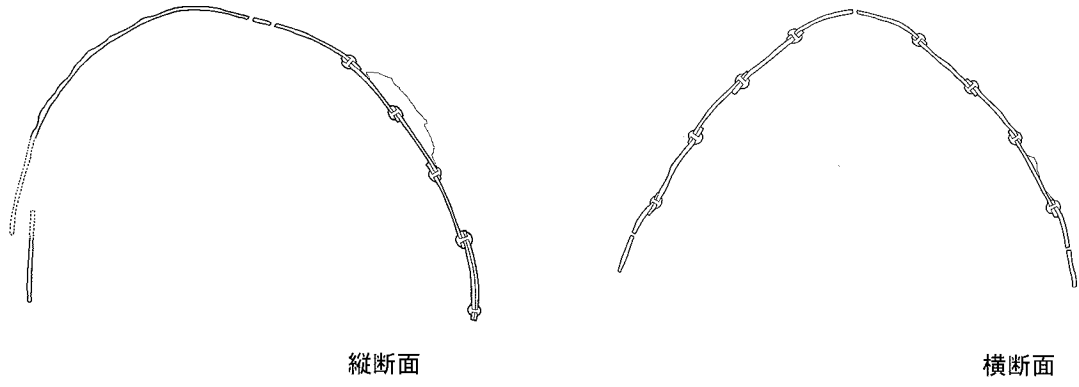
第6图 第1号墳実測图



第7図 第1号墳出土遺物実測図(1)

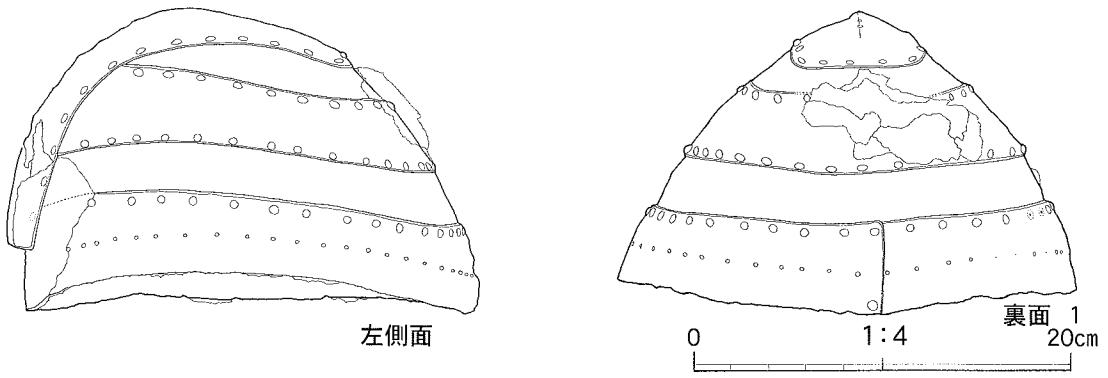
交互に4段に綴り、前頭部から頭頂部にかけて伏板で押さえ、各板は鉄製鋌で留めている。地板一・二段と胴巻板は、後頭部を巻いて前頭部中央で、約3.8cmの間隔を空けて、伏板に鋌留めされている。腰巻板は反対に、前頭部を巻いて後頭部中央で左右から重ねて鋌留めしている。このため伏板の衝角部下端は腰巻板上部に留められ、腰巻板は伏板の延長線にあたる部分は、軽く折り曲げられた稜線が形成されている。伏板の頂部には、三尾鉄を付したとみられる2個一対の径1.5mmの穿孔がある。鋌を留めた穿孔は腰巻板の前頭部を除





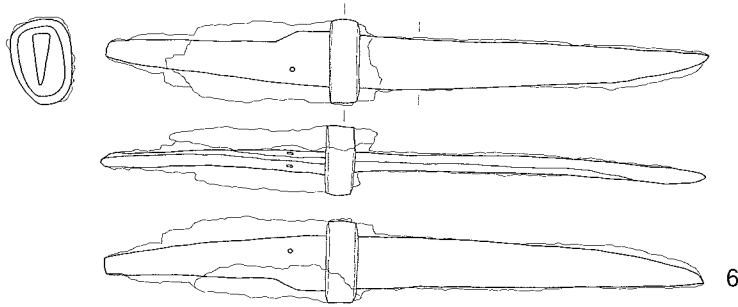
縦断面

横断面

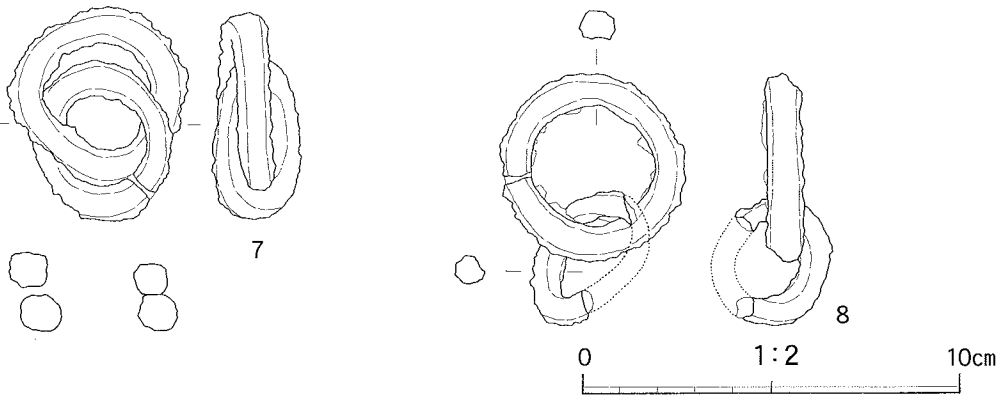


左側面

裏面 1  
20cm



6



7

8

第8図 第1号墳出土遺物実測図(2)

き、11mmから16mmの間隔であけられている。穿孔の径は1mmから1.5mmである。鉢の表面や裏面に漆の塗付や箔押し等の形跡は認められない。後頭部上部には布片が付着し、酸化鉄分の浸透により残存している。

3～5は琥珀の原石である。加工の跡は認められない。

6は刀子である。長さは15.9cm、刃部の幅は広いところで13.5mm、小さいところで8mmである。柄の部分は木質部が残り、幅8mm、厚さ2mmの縁金が巻かれている。柄頭から50mmの位置に1個の目釘穴が穿たれている。径は1.8mmである。

7・8は環状錫製品（耳飾）である。7は直径4.9cmのリングと3.9cmのリングを組合せ、8は直径4.9cmと4.2cmの2つのリングを組合せている。リングの太さは8mm～10mmで、基本的に丸い断面であるが、リング内側の面は幅6mm～7mmの平坦な面になっている。

### 3. 調査のまとめ

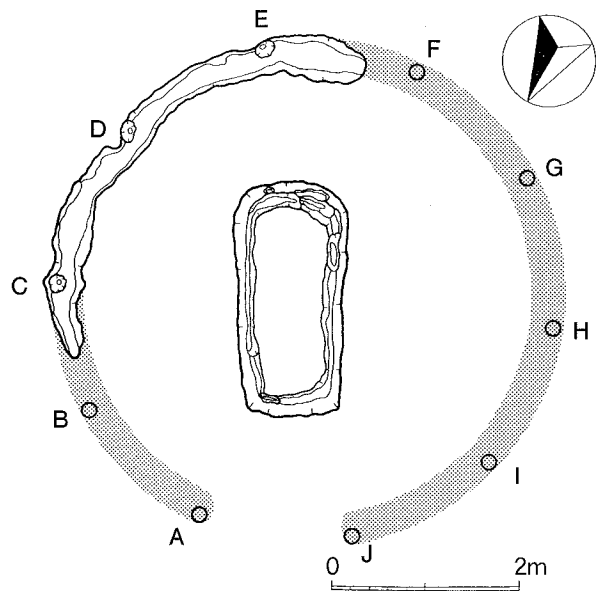
上田蝦夷森古墳群は、丘陵末端部の南西側緩斜面に立地している。これまで、岩手県内陸部盛岡地域以南における終末期古墳群の立地は、北上市の五条丸・猫谷地古墳群や、矢巾町藤沢狄森古墳群などに代表されるように、河川に近い自然堤防上や、低位段丘上などに立地するものが多かった。唯一、盛岡市上飯岡の高館古墳が、丘陵先端部に立地する礫廓墳である。反対に盛岡市より約40km北の岩手町浮島古墳群（岩手県指定史跡）は土坑墳であり、上田蝦夷森古墳群と同じく丘陵部に立地する古墳群である。このほか、御所野古墳群（一戸町）、谷地田古墳群（玉山村）など、盛岡以北の地域では丘陵地に立地する古墳群が散見される。これらはいずれも土坑墳である。

第1号墳は調査区西端部に位置し、調査区南西側にも数基の古墳が存在すると予測される。出土した土師器甕の年代は、その特徴から7世紀前半から中葉ごろに位置付けられるものである。土坑タイプの主体部と、墳丘裾の周隍が残存した。そのプランから円墳であるが、封土は全く残存せず、墳丘の高さは不明である。1.69mは周隍の全長16.96mの約1/10にあたり、等間隔に柱穴が配置されていたとすれば第9図のような10本の配置となる。主体部中軸線の延長両側にA、Jの2柱穴があり、この部分で周隍が開口していた可能性もある。被葬者の遺体は全く残存していないが、主体部の形状や副葬品の出土状況からは、頭部を南東側に置いた伸展葬と推定される。副葬品は、南東部から土師器甕1点、鉄製衝角付冑1点、鉄製刀子1、環状錫製品（耳飾？）2組、琥珀原石3点が出土している。これらの副葬品は、出土状況から埋葬時の原位置をある程度保って出土したと考えられる。副葬品のうち衝角付冑は、古墳に副葬された冑の出土例としては、国内で最北の出土例である。最も近い出土例は宮城県石巻市の五松山洞窟遺跡で、人骨や大刀、鉄鎌、骨角器とともに出土している。出土した須恵器埴瓶から6世紀末から7世紀前半の年代が与えられている(1)。明確な甲（鎧）を伴わず、冑の単独出土であること、鉢の形式が横矧板鋌留式であること、腰巻板の綴り穴が狭い間隔で穿孔され、小札綴と考えられること等、冑の様相や副葬の仕方について共通部分が多い。

上田蝦夷森古墳群第1号墳では、横矧板鋌留式衝角付冑であるが、伏板の衝角部が冑の腰巻板下端部まで下らず、腰巻板上端で留められている。同様の衝角付冑の出土例はほとんど認められないようであるが、埼玉県熊谷市中上条出土の短甲を着用した武人埴輪の冑（国指定重要文化財・東京国立博物館所蔵）に類例がある(2)。本古墳の場合、衝角付冑のほか甲（鎧）や太刀、鉄鎌など武具類の出土がないことから、この冑が実際に武具として使用されていたものか否かは明確でない。出土状況から考えれば、むしろ儀礼的な意味

での埋納であった可能性が高いと思われる。この冑の金属考古学的分析結果では、金属を構成する化学成分のうち、製鉄原料の組成比に近似すると推定される銅 (Cu)、ニッケル (Ni)、コバルト (Co) の3元素の成分比が、東北地方北部における終末期古墳群出土の鉄製品のものとは大きく異なり、冑が他地域からの搬入品もしくは他地域から供給された鉄素材を用いた加工品と考察されている(3)。冑の詳しい生産地や搬入経路については今後の研究課題である。

上田蝦夷森古墳群第1号墳の被葬者は、その規模や副葬品の内容から考えて現在の盛岡以北の地域に基盤をおきながら、東北地方以南の地域とも交流のある人物であり、在地集落若しくは、やや広域の首長層と推定される。しかし上田蝦夷森古墳群の近辺からは、同時期の集落はまだ確認されておらず、周辺域においても7世紀前半から中葉の集落はひじょうに少ない。この時期における盛岡周辺域の様相や上田蝦夷森古墳群の被葬者像については、まだ不明な部分が多い。



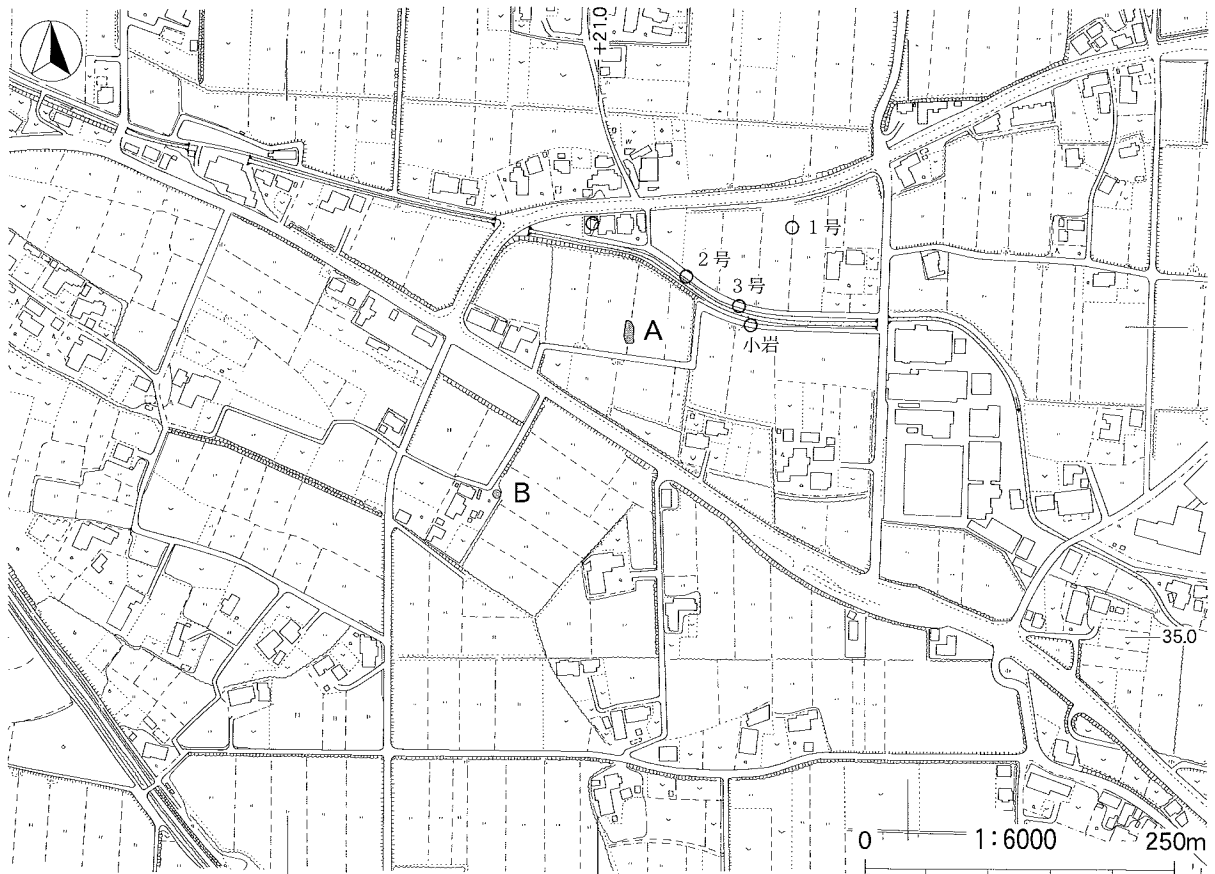
第9図 第1号墳平面模式図

- (1) 石巻市教育委員会(1988)『五松山洞窟遺跡発掘調査報告』
- (2) 東京国立博物館村井崑雄氏御教示
- (3) 岩手県立博物館赤沼英男氏による(本書第IV章)

## Ⅲ. 太田蝦夷森古墳群の調査概要

### 1. 古墳群の現況と過去の調査 (第10図)

太田蝦夷森古墳群は、盛岡市上太田字森合、字狄森、字大堀及び同市猪去字米倉にある終末期古墳群である。雫石川から南に600m～700m、史跡志波城跡から西に2000m～2500mの微高地上に立地する。標高はおよそ140m内外である。古墳群の範囲は南北約350m、東西約600mの範囲である。明治のころ古墳の数はおよそ40基を数えたが、大正15年ごろには16基、昭和10年には僅か5～6基がその残骸を留めるというように、古墳は近代以後の耕作や圃場整備等で急速に減少していった。現在地表で観察できるのは、墳丘状の高まりAとBの2箇所のみで、他は消滅するか地下に埋没しているものと推定される。高まりAは南北20m、東西10m、高さ約1.2mの規模であるが、地元ではこの高まりが古墳ではなく、田畑の余剰土を盛り上げたものともいわれている。高まりBは人家の敷地の隅に有り、径6m、高さ1mの円墳状で、雑木が茂り、頂部に石の祠がある。このほか消滅したもののうち、位置の判明しているもの5基は図示したが、他は記録が全く残されておらず、詳しい分布状況は不明である。



第10図 太田蝦夷森古墳群地形図

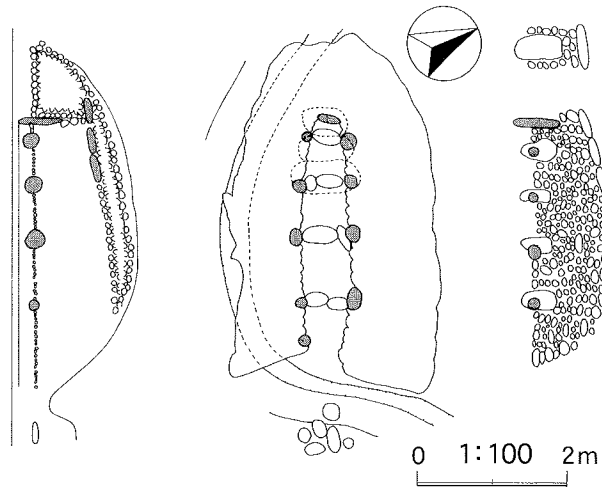
本古墳群の最初の発掘調査は、昭和27年(1952)小岩末治による調査で、古墳1基が調査されている(1)。本報告書ではこれを小岩古墳と仮称する。その後昭和44年(1969)には、盛岡市教育委員会による発掘調査が、岩手大学教育学部教授板橋源、同文部技官佐々木博康、盛岡市公民館吉田義昭によって実施されている。この調査では第1号墳が調査され、遺構実測図、調査記録写真ともに公表されている(2)。翌昭和45年、県営圃場整備事業に先立ち、岩手県教育委員会による発掘調査が板橋源、司東真雄(県文化財専門委員)、佐々木博康により実施されている(3)。この調査で第2号墳からは玉類・?帯金具、和同開珎などが出土したが、2号墳、3号墳の遺構実測図等は現在まで未公表である。当時の記録写真アルバムからは4号墳、5号墳、6号墳までが存在したことがわかるが、位置図、実測図等の記録が不明であり、位置が特定できない。この他、1号～3号墳の西方に1基の古墳の存在が知られているが、現在そこは人家の敷地となっている。この古墳が4号墳～6号墳のいずれかに該当する可能性もあるが詳細は不明である。また昭和55年、古墳群北側の県道盛岡鶯宿線の改良工事に伴う調査が、財団法人岩手県埋蔵文化財センターにより実施されている。この調査では古墳群の立地する微高地の北側を流れる小溝(自然地形か?)が検出され、古墳群の範囲外と考えられた(4)。なお、第1号墳は発掘調査後、調査当時の土地所有者の協力により、水田畦畔部に墳丘が保存されていたが、その後の所有者の異動、水田耕作等により、現在地表では全く確認できない。

今回の報告では、小岩古墳、第1号墳の遺構実測図を再トレースして調査成果の概要を記し、2号墳、3号墳については調査成果の概要と出土遺物の報告を記すこととした。また、4号墳から第6号墳については詳細不明のため、写真のみ掲載する。また、個々の遺物については、出土地点、出土状況不明の遺物が多いため、遺構の説明の後に一括して詳述する。

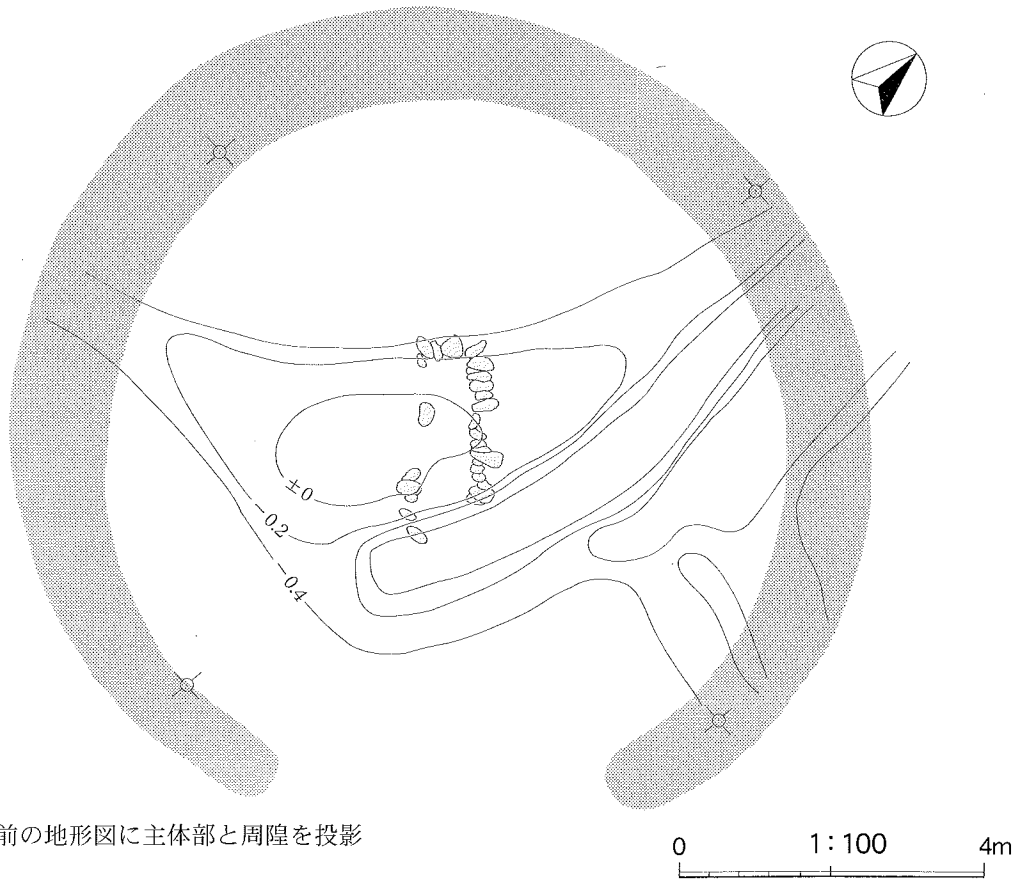
## 2. 調査の概要

### 小岩古墳 (第11図)

盛岡市上太田字森合33番地に存在する。鹿妻堰の堤に覆われ、古墳の南、東の2面は水田用水路に削られている。この時の調査は墳丘部分のみで、周隍を検出していないため、墳丘の平面規模は不明である。報文によれば、調査当時既に墳丘封土はほとんど残存しない状況であつたらしく、長さ4.8 m、幅3 m、高さ1.25 mの川原石の積石による主体部が残っていた。この主体部は、褐色シルト層の上に20数cm堆積した黒色土層上面を基底部として構築されている。この中央部には平面胴張形の礫槨が存在するが、報文の土層断面図によれば、礫槨部分の直下は黒色土層が薄く、20cmほどの厚さで「赤粘土」の堆積が確認されている。礫槨の主軸方位は磁北より西偏64°を示し、残存する長さは3.2 m、幅は中央部で60cm、入口と奥壁の幅は30cm、礫槨中央部の高さは約1 m、奥壁部分で65cmである。入口側の高さは天井石が残存せず不明である。礫槨の壁の構築は、奥壁には高さ60cm、幅30cm、厚さ10cmの扁平に割れた花崗岩を立て、両方の側壁には左右対称の位置に長さ40cm～50cm、太さ15cm～20cmの石柱状の支石を4個づつ立てている。底面には、左右の支石の基部をつなぐように、支石よりやや小ぶりの仕切石を敷居のごとく横に置いている。この上に小礫を5～7cmの厚さに敷き詰め、礫槨の底面としている。この上に小礫を5～7cmの厚さに敷き詰め、礫槨の底面としている。この立石や支石の間から礫槨上部にかけては、径10数cm程度の川原石を小口積みにして直立の壁を形成する。

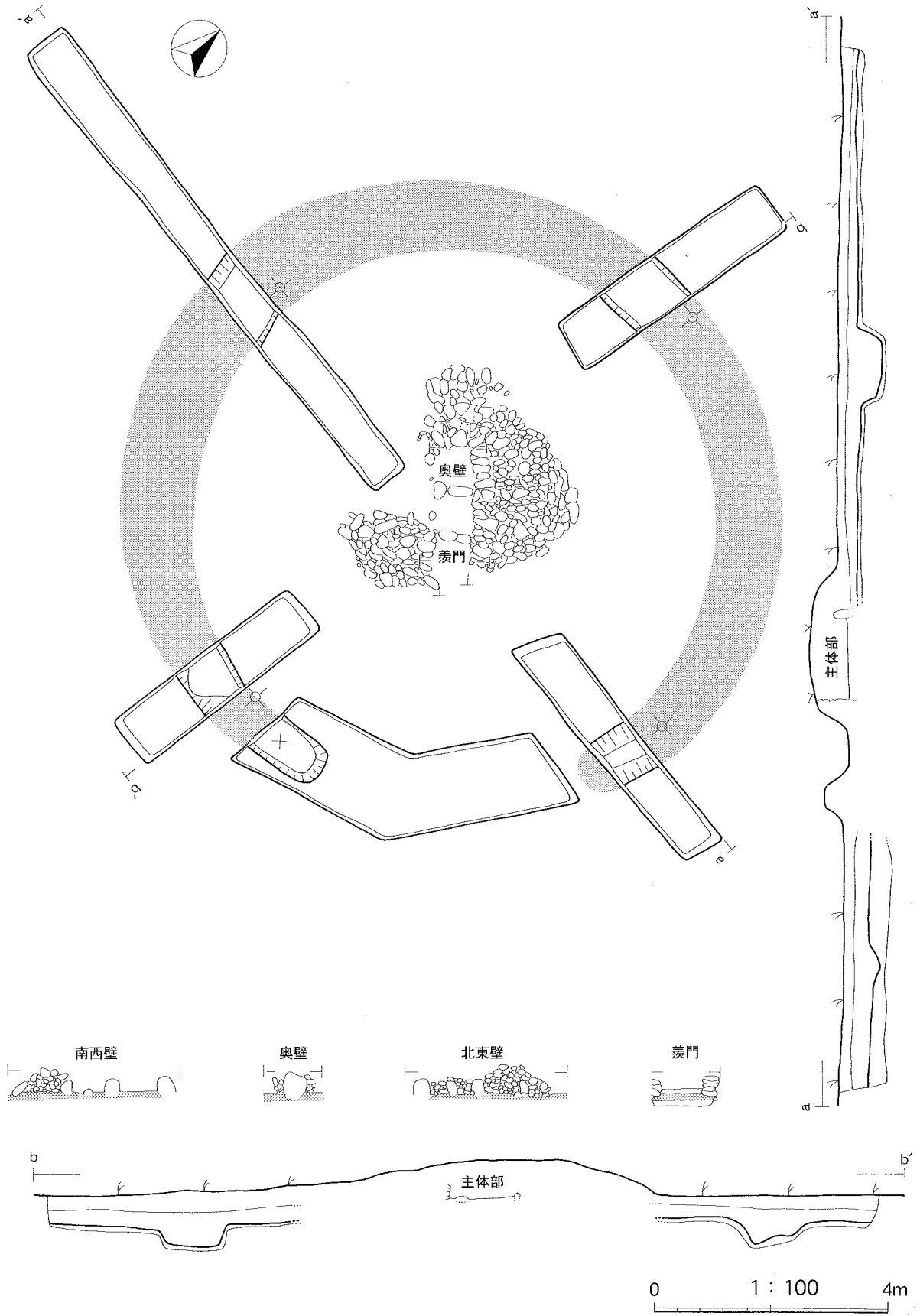


第11図 小岩古墳



※調査前の地形図に主体部と周隄を投影

第12図 第1号墳地形図



第13图 第1号墳実測图

石と石の間隙には赤粘土を充填し、崩落を防止している。天井石は礫櫛の奥部に3個残存するが、礫櫛内部に落ち込んだ天井石も存在した。大きさは径40cm～50cm、厚さ15cm内外である。礫櫛内部には黒色腐食土が堆積していた。

出土遺物は、礫櫛中央部底面から、須恵器の大甕破片、縄文地文の土器片が出土した。

## 第1号墳 (第12図～第13図)

小岩古墳の80m北東の地点、上太田字狄森2番1号に所在する。調査前まで、東西2.5m、南北6.5m、高さ0.6mの墳丘が、水田畦畔の一部となって残存していた。遺跡の層序は地山の黄褐色砂壤土(黄褐色シルト)の上に、20cm～30cmの厚さに黒褐色土(報文では黒褐色粘壤土)が堆積し、その上に25cm前後の黒色耕作土がある。古墳主体部の構築面は報文では明記されていないが、図示された高さの関係から、黒褐色土の上面に構築されていることになる。古墳の周隍は主体部から東西南北に伸びるトレンチで確認されているが、報文挿図による確認面は黄褐色砂壤土上面となっており、主体部構築面と整合しない。調査当時の土層記録写真で観察すると、レンズ状の灰白色火山灰の堆積が、周隍確認面の黄褐色砂壤土上面よりも上位にあり、実際には一層上の黒褐色粘壤土から掘り込まれていたと見るのが自然である。周隍の内径は9.2m、外径11.6mで、後述する主体部礫櫛(報文では石室)前面が開口する形で環状に周回する。周隍の幅は1m～1.5m、深さ30cm～60cmで、断面形は浅いU字形、ないしは逆台形である。内部の堆積は黒褐色土主体の自然堆積であり、上部に灰白色火山灰の堆積が認められた。

古墳主体部は中央部に径4m、高さ60cmの積石のマウンドがあり、その中央に礫櫛が構築される。主軸方位は磁北より西偏45°を示す。礫櫛は羨門部分が水田用水路で失われ、正確な全長は不明である。残存する長さは2.27m、幅は奥壁で48cm、中央部で62cm、東南部で65cm、側壁の残存高は52cmである。天井石は残存していない。奥壁中央には、幅30cm、高さ40cm、厚さ26cmの石が立てられ、側壁は北側に3箇所、南側に2箇所に支石があり、左右対称の配置である。2箇所仕切石に繋がれている。支石、仕切石の大きさは、幅15～25cm、長さ30～40cmである。側壁は30cm×13cmほどの川原石を小口積みになっている。礫櫛床面には、計3cm～4cmほどの円礫が7cm程度の厚さに敷き詰められている。その下に11cmの厚さに赤褐色砂層があり、その下に黒褐色土層がある。

礫櫛内部からの出土遺物は、過去の盗掘により皆無であった。周隍からは、須恵器甕破片が出土している。

## 2号墳・3号墳 (第8・9図版)

第1号墳の南西方向にあり、双方共に用水路北岸の土手中に確認された。2号墳は1号墳の南西90mにあり、この南東約43mに3号墳が存在する。報文には、遺構実測図が公表されていないため、古墳の詳細な規模、構造は不明である。写真によればいずれも礫櫛の主体部と周隍のある古墳で、礫櫛は川原石を小口積みとし、その様相は小岩古墳、第1号墳と同様である。周隍の埋土上部には、1号墳同様、灰白色火山灰層が確認された。古墳の平面規模は明記されていないが、1号墳同様、直径8m～10mの円墳であったと推定される。



第2号墳主体部南壁近くの底面からは、おびただしい数の玉類、和同開珎、鍔帯金具が出土している。また第2号墳・第3号墳の主体部と周隄より須恵器、土師器の破片が出土している。この時の出土遺物の内容は次のように報告されている（岩手県教委『太田蝦夷森古墳二報』）。

表1 太田蝦夷森古墳群2号墳・3号墳出土遺物

名	称	個数	備考
土器・土製品 (2号墳・3号墳)	土師器破片	3	
	須恵器破片	13	
	陶土器破片	3	
	土製品破片	1	
古銭・金具類 (2号墳)	和銅開珎残欠	1	
	鍔帯金具残欠	2	
	円筒状金具破片	2	
玉類 外 (2号墳)	切子玉	1	玉の色調には藍、緑、黄など多種あり 破片のままです計上 2個は完形。他の1個は数片に分かれているが1個体分になるので1個と計上
	瑪瑙製勾玉	14	
	硬玉製勾玉	2	
	石質未詳勾玉	3	
	金属製勾玉	1	
	ガラス子製丸玉	384	
	同破片	23	
	石製丸玉	1	
	材質未詳丸玉	3	
	管玉残欠	51	
	植物種子残欠	若干	

#### 4号墳～6号墳（第9・10図版）

この3基の古墳は、調査は実施されているが、写真以外に詳しい記録が公表されておらず、場所が特定できないものである。3基とも、礫塚の一部らしい礫の集中箇所が確認されているが、6号墳は礫塚の基底部分が発見され、底面の小礫敷きも残存していた。このいずれかの古墳が、1号墳～3号墳の西方の古墳に該当する可能性もあるがはっきりしない。各古墳の遺物についても明らかでない。

### 3. 古墳群出土遺物（第14図～第19図・第1・2表）

太田蝦夷森古墳群のなかで最も出土遺物の多かったのは、第2号墳、第3号墳の調査であった。第1表に示した遺物の中には、管玉残欠や土製品、円筒状金具など、今日所在の不明なものも存在するので、所在の明らかな遺物のみ図示・グラフ化して記述する。

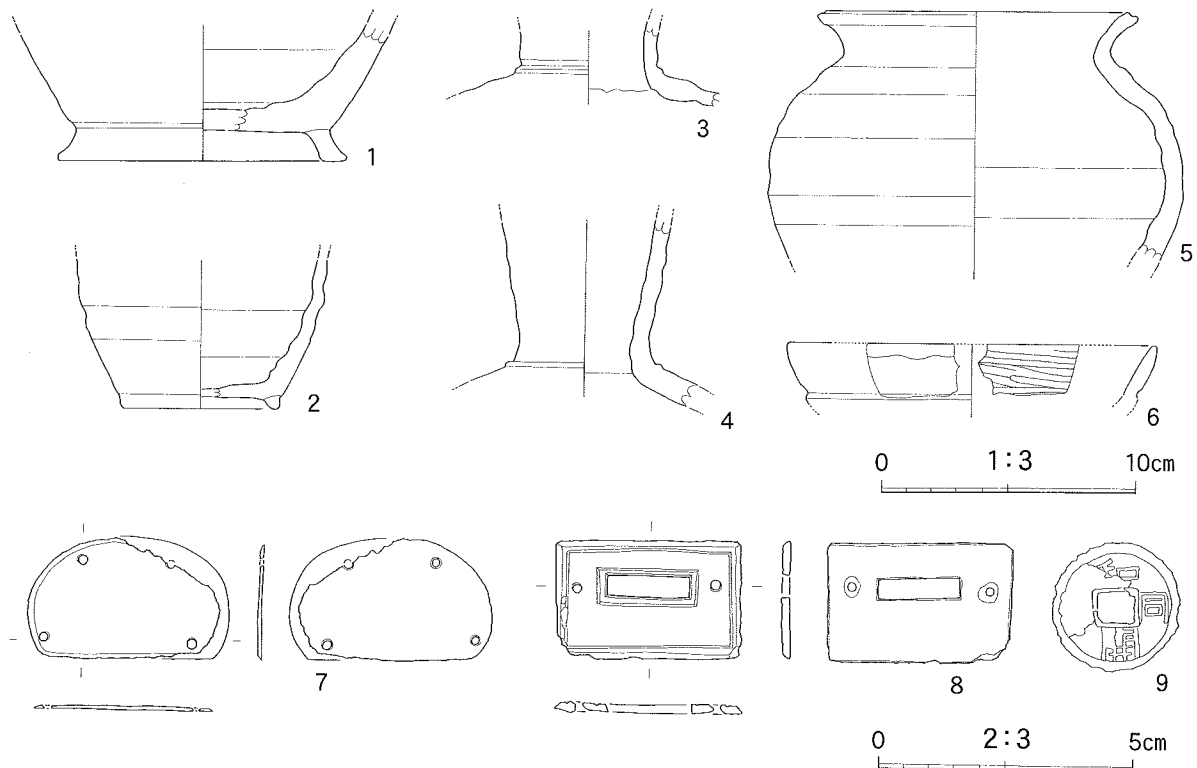
## 土器

出土土器の大半は第2号古墳と第3号墳とされるが、個々の出土地点は明らかに出来ない。

第14図1～5は須恵器である。1は高台付の小形瓶または小型壺の底部破片である。明るい紫灰色に焼かれ、胎土は細かく緻密で焼成は良好である。体部下端部には軽微な篋削りがある。外面には自然釉がかかる。2は小型瓶の体部下半の破片である。何号墳なのかは不明であるが、「石積み東トレンチ周溝内」という註記がある。青灰色に焼かれ、底部には小さく低い高台が付される。3と4は長頸瓶の頸部の破片である。頸部と体部の接合部分の外面には小さな突帯が廻る。3は②、4は②第2層「No.3」の註記がある。5は小型の壺である。青灰色に焼かれ、焼成はあまり良好でない。体部下部は回転篋削りされている。③「No.27」の註記がある。6は土師器の坏である。外面には口縁部と体部の境に段が認められる。にぶい橙色を呈し、胎土はやや密で、内面と外面口唇部は篋ミガキののち黒色処理されている。①「No.12」の註記がある。

## 銚帯金具

第14図7と8は金銅製の銚帯金具である。第2号墳主体部から出土している。7は丸軋の裏金具で、表面縁辺部がやや面取りされ、4つの穿孔がある。内外に鍍金の痕跡がある。8は巡方で中央やや上よりに長方形の穴があり、左右1対の穿孔がある。表面外周に面取りがあり、外周内側と長方形の穴の外周に細い溝がある。内外鍍金されている。



第14図 太田蝦夷森古墳群出土土器・金属製品



第15図 太田蝦夷森古墳群出土刀剣類

## 銭貨

第14図9は和同開珎で、第2号墳主体部から出土している。銅製であるが腐食が著しい。

## 刀剣

盛岡市上太田上狄森の佐々木一男氏所蔵資料で、第1号墳周辺の古墳から出土したものとされている。4振あり、うち2振は蕨手刀、他は直刀である。今回は蕨手刀と直刀1振りを図示したが、いま1振の直刀は、保存状態が良好でないため図示しなかった。

第19図1は直刀で、切先と柄頭部分を欠損している。残存する長さは61.5cm、刀身には5mmほどの反りがある。刃の先幅は3.3cm、元幅は4.3cmで、先の部分から刀身の中ほどにかけてはほぼ同じ幅である。柄の幅は刀身との接続部で2.9cm、柄頭部分で1.9cmを測る。峰幅は刀身の元の方で9mm、中ほどで8mm、切先近くで4.5mmあり、刀身の断面形は鑄のない二等辺三角形である。柄の部分の厚さは7mm～8mmで、峰側がやや厚い。

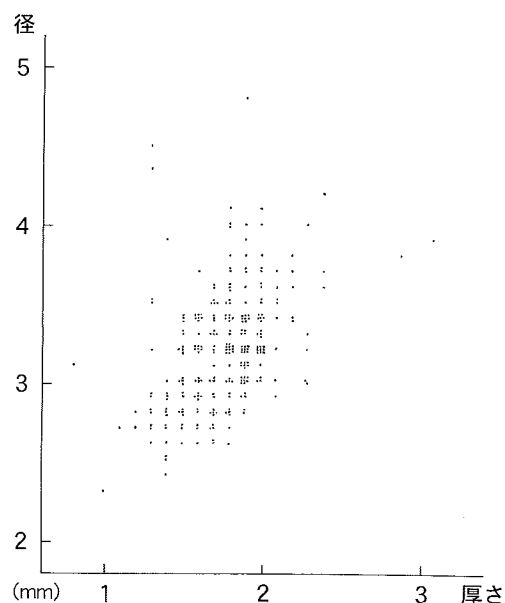
2の蕨手刀は1966年石井昌国前掲書の実測図と現状の実測図両方を掲載した。現在この刀は柄頭部分が失われているが、元は全長47.7cmほどで、1cmの反りがある。刀身は34.5cm、元幅は3.8cm、先幅が2.5cmである。峰幅は4.5mmほどで柄の厚さは4mm～5mmである。

3の蕨手刀はかなり傷みが激しく、今回は実測しなかった。図は1966年石井昌国の『蕨手刀』掲載図であるが、この時点で既に、柄部分が相当傷んでいたことがわかる。現状では柄頭部分の破片は失われ、刀身の腐食も相当進んでいる。当時の実測によれば、残存する長さは53.5cmあり、刀身は42.1cm残り、8mmほどの反りをもっていた。元幅は3.9cm、先幅は3.0cm、峰幅は5mmである。

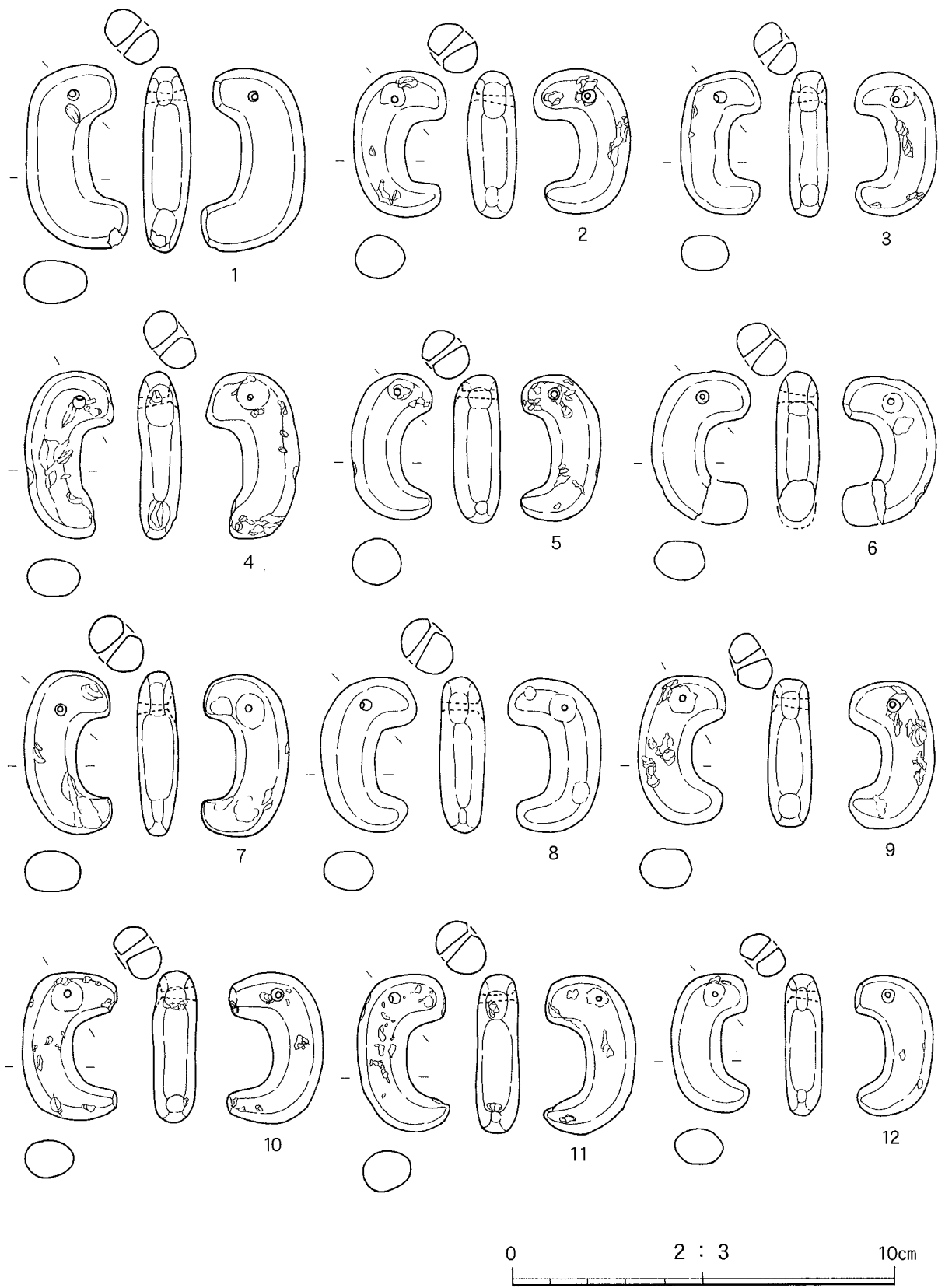
## 玉類

第17図～19図は玉類である。すべて第2号墳主体部からの出土である。勾玉が20点、切子玉1点、螺旋玉1点、丸玉120点、小玉263点が出土した。このうち勾玉は泥岩製(1)1点、瑪瑙製(2～13)が14点、碧玉製(14・18)2点、翡翠製(16)

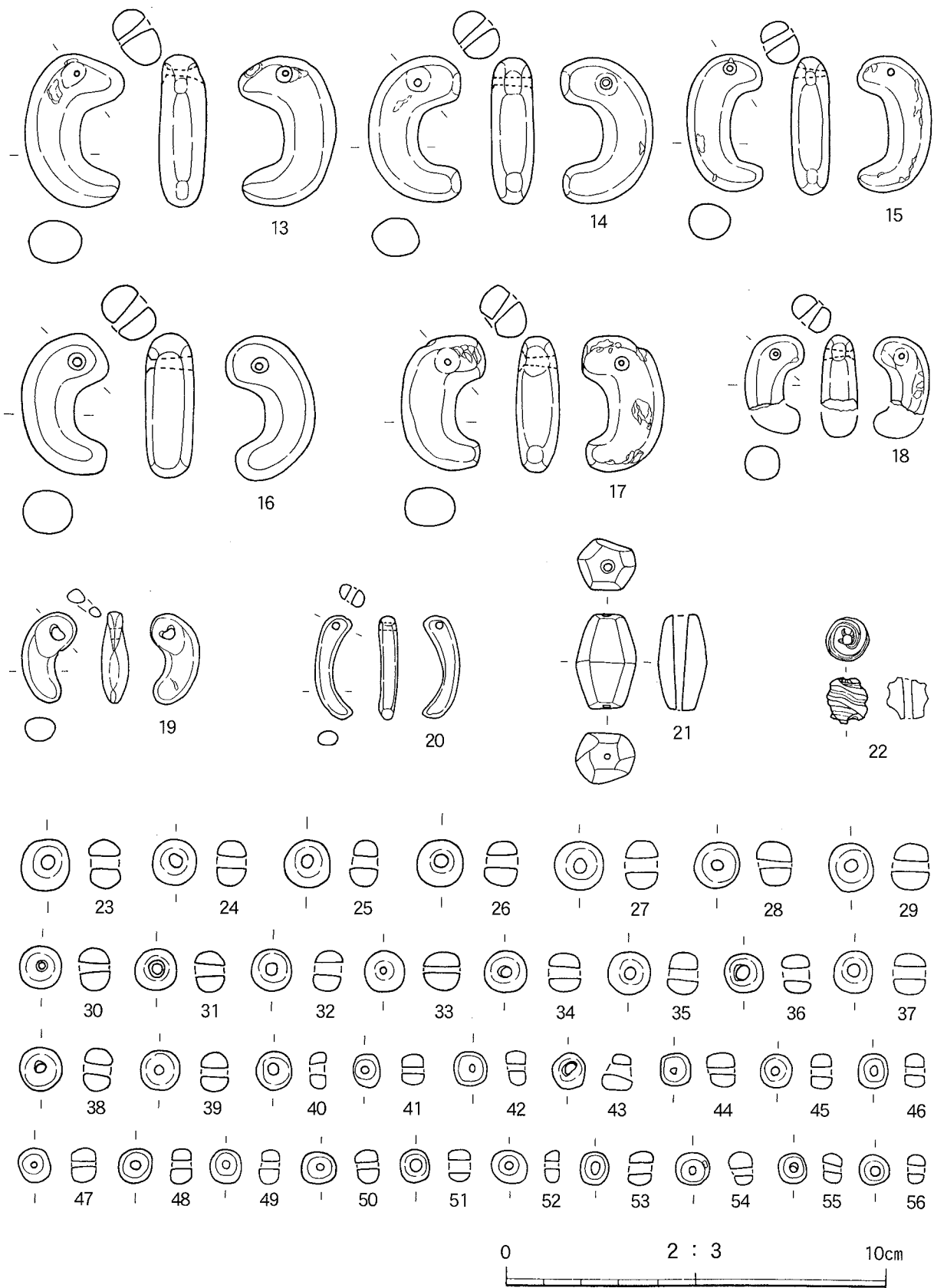
1点、滑石製(19)銅製(20)1点である。滑石製のもの小形で紐を通す穴は使用による摩擦で拡大変形している。銅製の勾玉は細く小さい。切子玉(21)は水晶製、螺旋玉(22)はガラス製で、類例がないので形状から螺旋玉としたが、トンボ玉の可能性もある。丸玉(23～142)は全てガラス製で、青色、紺色、濃紺色のものが多い。小玉263点は大きさの計測グラフを第16図に示した。径が2.6mm～3.7mm、厚さ1.3mm～2.0mmのものが多い。全てガラス製で黄色のものが2点、青色の玉が8点、青緑色のものが5点あり、紺色ないし濃紺色が248点ある。



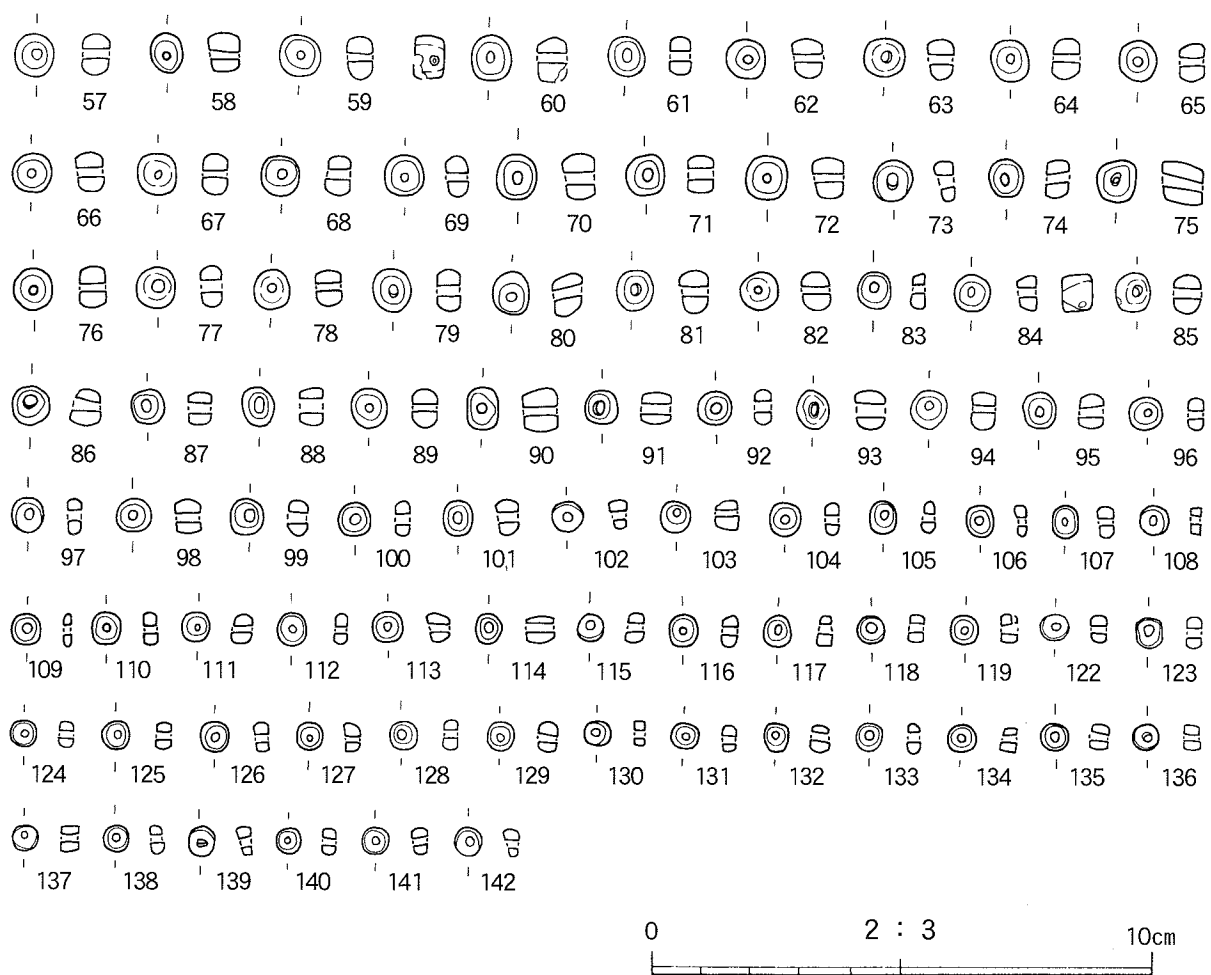
第16図 第2号墳出土ガラス小玉



第17图 第2号墳出土玉類実測図(1)



第18图 第2号墳出土玉類実測図(2)



第18図 第2号墳出土玉類実測図(3)

第2号墳玉類計測表

(単位: mm, g)

古墳番号	番号	登録番号	種類	地点・層位	材質	長さ	幅(径)	厚さ(高)	重量(g)	備考
2	1	13	勾玉	主体部底面	泥岩?	48.6	27.2	11.9	15.4	灰茶色、酸化鉄付着
2	2	41	勾玉	主体部底面	瑪瑙	33.3	23.8	12.1	13.2	飴色
2	3	32	勾玉	主体部底面	瑪瑙	37.6	20.3	9.7	10.3	飴色
2	4	36	勾玉	主体部底面	瑪瑙	43.7	23.8	10.8	14.0	飴色
2	5	46	勾玉	主体部底面	瑪瑙	37.9	20.2	11.9	12.1	飴色
2	6	68	勾玉	主体部底面	瑪瑙	38.7	25.6	10.8	11.9	飴色(一部欠損)
2	7	35	勾玉	主体部底面	瑪瑙	43.9	23.6	11.1	14.9	飴色
2	8	42	勾玉	主体部底面	瑪瑙	40.3	22.8	11.0	13.0	飴色
2	9	39	勾玉	主体部底面	瑪瑙	33.4	21.9	11.1	12.7	飴色
2	10	70	勾玉	主体部底面	瑪瑙	39.3	24.7	10.8	13.2	飴色
2	11	34	勾玉	主体部底面	瑪瑙	41.2	23.5	10.9	13.6	飴色
2	12	38	勾玉	主体部底面	瑪瑙	36.3	20.0	9.3	9.2	飴色
2	13	44	勾玉	主体部底面	瑪瑙	39.5	24.8	11.8	13.7	飴色
2	14	37	勾玉	主体部底面	碧玉	38.4	23.5	11.0	12.3	緑色
2	15	43	勾玉	主体部底面	瑪瑙	35.9	19.8	10.0	8.3	飴色
2	16	40	勾玉	主体部底面	翡翠	37.4	22.1	12.2	17.4	薄緑色
2	17	45	勾玉	主体部底面	瑪瑙	35.6	22.1	11.2	11.0	飴色
2	18	5	勾玉	主体部底面	碧玉	20.0	15.2	9.2	3.3	緑色(一部欠損)

## 第 2 号墳玉類計測表

(単位：mm, g)

古墳番号	番 号	登録番号	種 類	地点・層位	材 質	長 さ	幅(径)	厚さ(高)	重量(g)	備 考
2	19	71	勾 玉	主体部底面	滑 石	23.6	12.3	6.5	2.0	灰 色
2	20	47	勾 玉	主体部底面	銅	27.3	10.0	4.0	3.5	青銅色
2	21	69	切子玉	主体部底面	水 晶	25.1	15.5	13.3	7.1	無色透明
2	22		螺旋玉	主体部底面	ガ ラ ス		11.5	11.4	2.81	酸化鉄色
2	23	丸14-1	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		12.8	7.9	1.6	青 色
2	24	56	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		12.2	8.5	1.6	紺 色
2	25	丸14-3	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		11.9	7.4	1.3	青 色
2	26	丸14-2	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		11.7	8.7	1.5	青 色
2	27	69	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		12.8	8.7	1.9	紺 色
2	28	73	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		12.1	8.6	1.7	紺 色
2	29	60	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		12.6	9.6	2.0	紺 色
2	30	58	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		11.3	7.8	1.3	紺 色
2	31	丸14-5	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		10.5	7.9	1.2	青 色
2	32	67	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		10.7	8.0	1.2	濃緑色
2	33	57	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		10.8	9.7	1.4	紺 色
2	34	11	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		11.1	8.4	1.4	紺 色
2	35	丸14-4	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		11.2	8.2	1.4	紺 色
2	36	64	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		10.6	7.8	1.1	濃緑色
2	37	9	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		10.8	8.1	1.2	淡青色
2	38	61	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		11.2	7.9	1.3	紺 色
2	39	62	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		10.6	7.5	1.1	紺 色
2	40	72	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		10.0	4.9	0.7	濃紺色
2	41	53	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.3	6.9	0.6	紺 色
2	42	丸14-14	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.4	5.3	0.6	濃紺色
2	43	54	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		9.7	8.5	0.8	明紺色
2	44	丸14-8	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.7	7.8	0.9	紺 色
2	45	63	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.9	5.7	0.7	濃紺色
2	46	丸14-12	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		9.5	5.7	0.6	濃紺色
2	47	丸14-13	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.4	6.8	0.7	濃紺色
2	48	丸14-6	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.9	5.4	0.7	紺 色
2	49	丸77-4	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.6	5.2	0.5	濃紺色
2	50	丸77-2	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.8	6.6	0.8	濃紺色
2	51	50	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		9.0	5.9	0.9	茶 色
2	52	丸77-1	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.8	4.4	0.5	淡紺色
2	53	丸77-3	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.4	7.4	0.7	紺 色
2	54	丸14-10	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.7	6.3	0.6	淡緑青色
2	55	丸77-23	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		7.6	5.5	0.5	濃紺色
2	56	丸77-10	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.1	5.0	0.4	濃青色
2	57	丸77-7	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.2	5.9	0.7	濃紺色
2	58	丸77-11	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.3	4.0	0.4	淡紺色
2	59	丸77-6	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.7	5.0	0.6	濃紺色
2	60	丸77-5	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.6	5.8	0.5	紺 色
2	61	丸77-15	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		7.4	4.3	0.4	紺 色
2	62	丸77-12	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.2	6.2	0.5	濃紺色
2	63	丸77-18	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.2	5.2	0.5	濃青紫色
2	64	丸77-14	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.1	5.6	0.6	濃紺色
2	65	丸77-21	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		7.9	6.3	0.5	紺 色
2	66	丸77-13	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.3	5.6	0.6	濃紺色
2	67	丸77-16	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.8	5.5	0.5	青 色
2	68	丸77-20	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		7.6	4.3	0.5	濃紺色
2	69	丸77-17	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.1	4.6	0.4	淡紺色
2	70	52	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		9.4	6.9	0.7	濃紺色
2	71	51	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.0	5.6	0.5	青紫色
2	72	丸14-9	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		8.8	6.8	0.9	濃紺色



## 第 2 号墳玉類計測表

(単位：mm, g)

古墳番号	番 号	登録番号	種 類	地点・層位	材 質	長 さ	幅(径)	厚さ(高)	重量(g)	備 考
2	73	丸77-32	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.6	4.3	0.3	濃青紫色
2	74	丸77-9	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.8	5.0	0.5	濃青紫色
2	75	丸14-7	丸 玉	主体部底面	ガラス		8.6	8.7	1.0	濃紺色
2	76	丸77-8	丸 玉	主体部底面	ガラス		8.4	5.1	0.6	濃紺色
2	77	丸77-20	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.9	4.8	0.4	青 色
2	78	丸77-33	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.2	5.3	0.4	濃紺色
2	79	丸77-19	丸 玉	主体部底面	ガラス		8.2	5.8	0.6	濃紺色
2	80	丸77-26	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.9	6.5	0.6	濃紺色
2	81	丸77-25	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.9	6.2	0.6	濃紺色
2	82	55	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.1	3.4	0.2	濃紺色
2	83	丸77-40	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.1	3.4	0.2	濃紺色
2	84	丸77-40	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.1	3.4	0.2	淡紺色
2	85	丸77-27	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.5	6.2	0.4	濃紫灰色
2	86	269-1	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.7	6.1	0.5	紺 色
2	87	丸77-35	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.6	5.6	0.3	青紫色
2	88	丸77-32	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.3	5.4	0.3	濃青紫色
2	89	丸77-29	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.7	5.3	0.5	濃紺色
2	90	丸14-11	丸 玉	主体部底面	ガラス		8.6	7.4	0.6	淡紺色
2	91	丸77-34	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.4	6.6	0.4	青紫色
2	92	33	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.6	4.1	0.3	明紺色
2	93	丸77-28	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.6	6.6	0.4	青 色
2	94	丸77-30	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.1	5.2	0.4	濃紺色
2	95	269-3	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.0	5.6	0.4	濃紺色
2	96	丸77-43	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.5	3.5	0.2	透明紺色
2	97	丸77-37	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.9	3.3	0.2	紺 色
2	98	269-2	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.1	5.5	0.4	青 色
2	99	丸77-41	丸 玉	主体部底面	ガラス		7.0	4.4	0.2	濃紺色
2	100	丸77-38	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.6	3.3	0.2	透明紺色
2	101	丸77-39	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.9	5.0	0.3	青 色
2	102	丸77-46	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.0	4.0	0.2	青紫色
2	103	丸77-44	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.2	4.9	0.3	紺 色
2	104	丸77-36	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.8	3.0	0.2	透明紺色
2	105	丸77-50	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.2	3.3	0.1	透明紺色
2	106	丸77-47	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.3	3.0	0.1	透明紺色
2	107	丸77-48	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.4	3.7	0.2	淡紺色
2	108	丸77-49	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.8	3.0	0.2	淡紺色
2	109	丸77-51	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.2	2.2	0.1	透明紺色
2	110	丸77-45	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.3	3.2	0.2	濃青紫色
2	111	丸77-58	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.9	4.4	0.1	淡紺色
2	112	丸77-52	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.0	2.9	0.1	透明紺色
2	113	丸77-55	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.8	4.6	0.1	紺 色
2	114	丸77-42	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.5	6.4	0.2	青 色
2	115	丸77-64	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.4	3.9	0.2	青紫色
2	116	丸77-54	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.3	3.6	0.2	紺 色
2	117	丸77-53	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.8	3.6	0.1	黒 色
2	118	丸77-57	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.4	3.6	0.2	青紫色
2	119	269-6	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.7	3.4	0.1	紺 色
2	120	丸77-59	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.7	3.8	0.2	透明紺色
2	121	丸77-61	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.7	3.4	0.2	濃青紫色
2	122	丸77-73	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.0	3.4	0.1	淡紺色
2	123	丸77-63	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.7	3.6	0.1	透明紺色
2	124	丸77-62	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.0	3.3	0.1	青紫色
2	125	丸77-60	丸 玉	主体部底面	ガラス		5.7	3.5	0.1	淡紺色
2	126	丸77-56	丸 玉	主体部底面	ガラス		6.0	4.0	0.2	青紫色

## 第2号墳玉類計測表

(単位：mm, g)

古墳番号	番 号	登録番号	種 類	地点・層位	材 質	長 さ	幅(径)	厚さ(高)	重量(g)	備 考
2	127	丸77-68	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.4	4.4	0.1	紺 色
2	128	丸77-66	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.0	2.6	0.1	紺 色
2	129	丸77-65	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.4	3.6	0.1	淡紺色
2	130	丸77-72	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.3	4.2	0.2	青紫色
2	131	丸77-76	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.4	3.3	0.1	淡紺色
2	132	丸77-67	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.0	3.4	0.1	紺 色
2	133	269-4	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.7	4.2	0.1	薄緑色
2	134	丸77-70	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.0	3.5	0.2	透明紺色
2	135	丸77-69	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		4.9	4.3	0.1	淡紺色
2	136	丸77-71	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.2	2.8	0.1	紺 色
2	137	269-5	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		6.0	3.4	0.1	濃青紫色
2	138	丸77-77	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.2	2.7	0.1	紺 色
2	139	丸77-75	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.3	3.7	0.1	青紫色
2	140	丸77-74	丸 玉	主体部底面	ガ ラ ス		5.9	2.5	0.1	透明紺色
2	141		丸 玉	主体部底面	鉛化ガラス					著しく腐食
2	142		丸 玉	主体部底面	鉛化ガラス					著しく腐食

## 4. まとめ

太田蝦夷森古墳群はこれまでに7基の古墳が調査されており、すべて川原石積の礫塚を主体部とする円墳である。礫塚墳の分布では最も北限に位置する。1号墳は周隍が確認されており、主体部南側で溝の開口部分が存在することが明らかである。古墳の規模は周隍の内法で、計9.2mと判明する。他の6基の古墳も、主体部等の状況から、極端な規模の違いはないものと思われる。調査された古墳のうち、第2号墳の主体部からは、夥しい玉類や和同開珎・銚帯金具等が出土している。玉類には勾玉、管玉、切子玉、丸玉、小玉のほか、ガラス製の螺旋形に作られた玉がある。また過去には、具体的な出土地点は不明確ながら、1号墳の周辺から直刀2振、蕨手刀2振、土師器、須恵器が耕作中に出土している。こうした出土遺物からは、古墳群構築の年代は概ね8世紀代に位置付けられる。太田蝦夷森古墳群はこれまで古墳群の面的な調査が一度も実施されておらず、墳丘が残存するものや、石積の主体部が露出する場合など、地表面で発見しやすい古墳のみが調査対象となっていた点は否めない。このため同一古墳群のなかに、土坑タイプの主体部をもつ古墳が存在しないか否か、今の段階では未確認である。

太田地区では今のところ7世紀の集落が存在するか否か明らかではなく、8世紀代に入ってから明確になる。この時期の集落は、近くでは八卦遺跡、志波城跡、竹鼻遺跡等で確認されている。低湿地に近い微高地や低位段丘上などに認められ、旧河道や低地での水稻耕作にかかわる集落立地である。太田蝦夷森古墳群は、雫石川南岸地域の集落群の首長層もしくは家父長層の墓域であろう。

- (1) 小岩末治 (1955) 「岩手大田村蝦夷森古墳調査報告」『岩手史学研究第18号』岩手史学会
- (2) 盛岡市教育委員会 (1969) 『盛岡市上太田蝦夷森古墳』
- (3) 岩手県教育委員会 (1970) 『盛岡市上太田蝦夷森古墳二報』
- (4) 財団法人岩手県埋蔵文化財センター (1981) 『蝦夷森古墳群第4次発掘調査報告書』
- (5) 石井昌国 (1966) 『蕨手刀—日本刀の始源に関する一考察—』

# Ⅳ 上田蝦夷森古墳出土鉄器の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館

赤 沼 英 男

## 1 はじめに

岩手県盛岡市に立地する上田蝦夷森古墳群は、駐車場建設に伴い平成元年に緊急発掘調査された遺跡である(1)。調査の結果、縄文時代の土坑76基、竪穴式住居跡1棟、古墳1基が検出され、古墳主体部からは、土器とともに衝角付冑、刀子、および環状錫製品が確認された。衝角付冑については、古墳に埋納されたものとしては国内最北の出土例とされる(1)。検出された古墳は1基で、ほぼ同時代に比定される集落も未確認であるという(1)。被葬者像を解明するためには、衝角付冑をはじめとする出土遺物が古墳に埋納されるまでの来歴を明らかにする必要がある。

近年、出土金属製遺物については、製作に使用された地金の組成を解明し、その結果を形態学的研究結果に加味して、製作技法や入手ルートを推定しようという金属考古学的研究が、幾つかの研究機関において行われている。以下では、主として上田蝦夷森古墳出土冑の金属考古学的結果について報告する。

## 2 調査資料

金属考古学的調査を行った資料は衝角付冑と刀子の2点である。刀子についてはX線透過観察を、衝角付冑についてはX線透過観察を行った後微小試料片を摘出し、組成分析を行った。第3表に調査資料番号、調査資料名、遺物番号、推定時期を示す。

## 3 調査試料片の摘出

衝角付冑からの試料片摘出は、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下、ハンドドリルという）を使い、資料の外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら慎重に実施した。摘出した約0.2gの試料片を2分し、大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。試料片摘出位置は第20図a1に示すとおりである。

## 4 調査方法

組織観察用試料片はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、試料片に残存する非金属介在物を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）で分析した。化学分析用試料片は表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで丹念に削り

a1

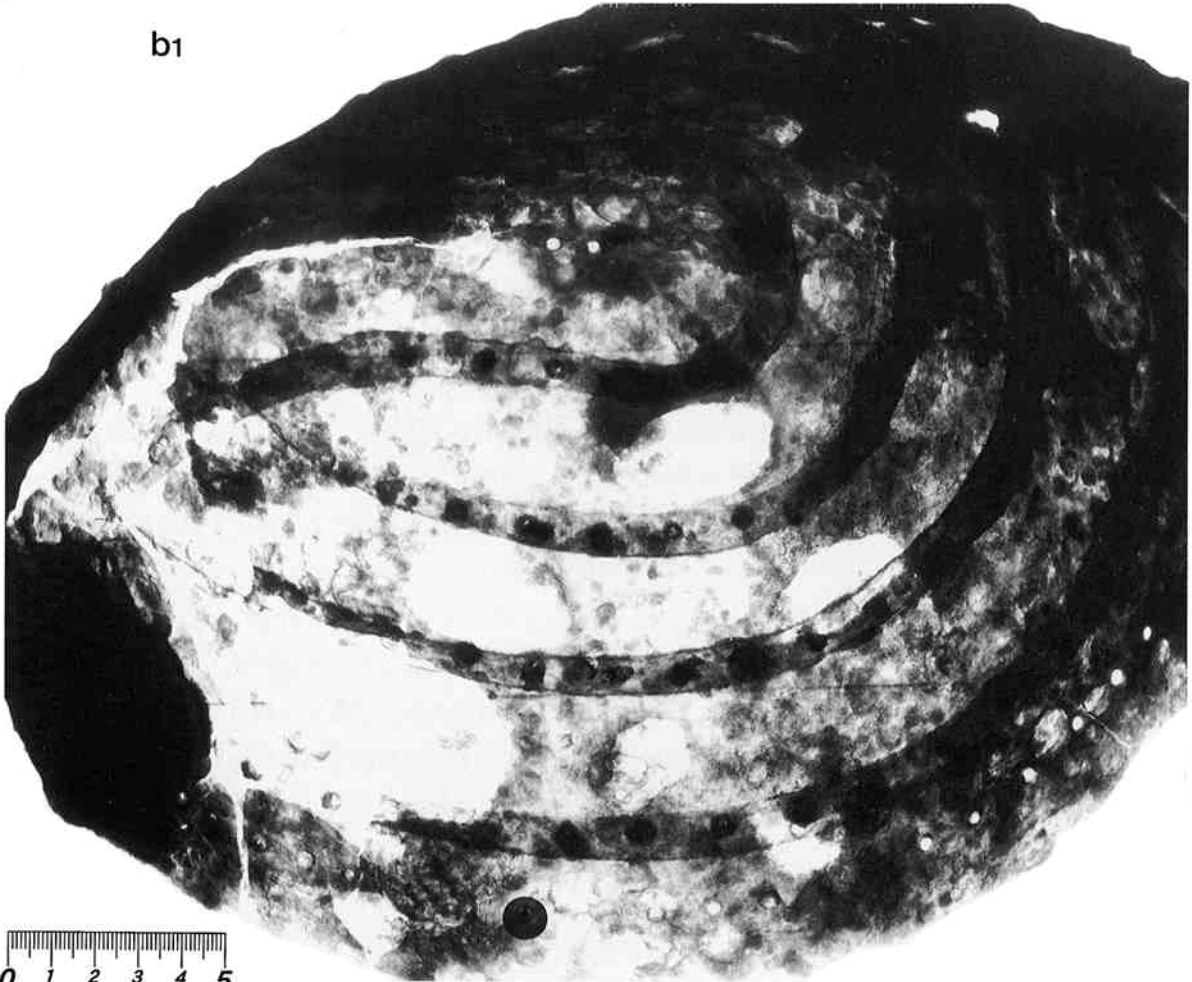


a2



0 10cm

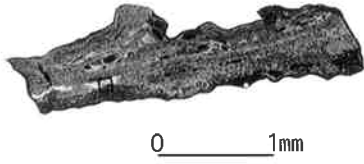
b1



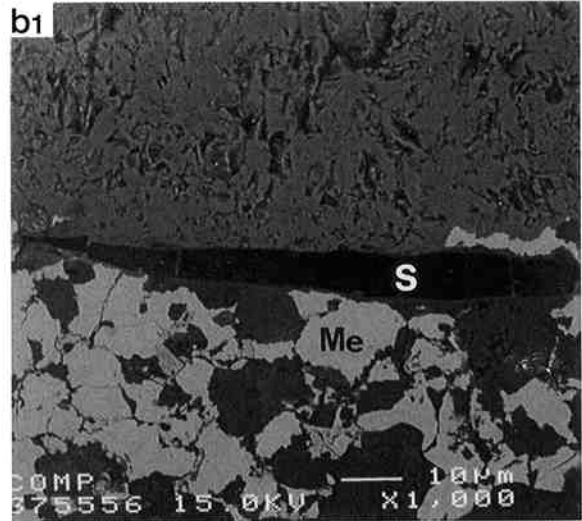
第20図 衝角付甗の外観（保存処理後）とX線透過写真像

a1 : a2 : 外観、矢印は試料片摘出位置。b1 : X線透過写真像。

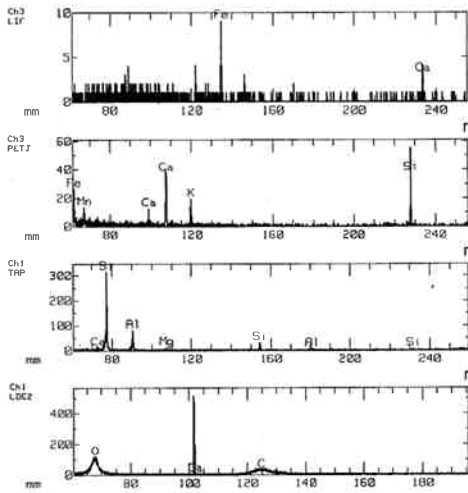
a1



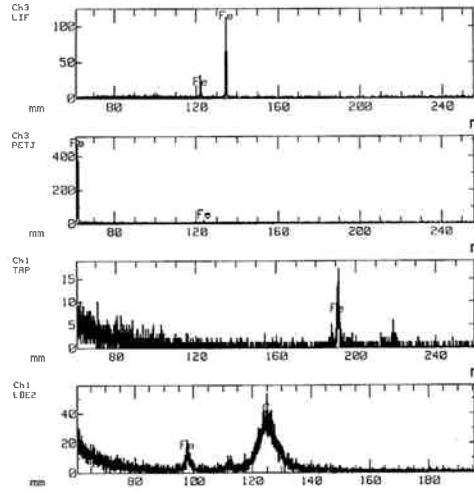
b1



b2



b3



### 第21図 衝角付冑から抽出した試料片の組織観察結果

a1：マクロ組織。b1：a1の枠で囲んだ内部に残存する非金属介在物のEPMAによる組織像（COMP）と訂正分析結果。b2・3：EPMAによる定性チャート。S：ガラス質ケイ酸塩、Me：鉄粒。

a



b



### 第22図 刀子の外観とX線透過写真像

a：外観、b：X線透過写真像。

落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料片を130℃で2時間以上乾燥しメノー乳鉢で粉碎した後、テフロン分解容器に秤量し酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe（全鉄）、Cu（銅）、マンガン（Mn）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、リン（P）、チタン（Ti）、けい素（Si）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、バナジウム（V）の12元素を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-OES法）で分析した。

## 5 調査結果

### 5-1 X線透過写真

衝角付冑は、幅4～5cmの鉄板を4枚重ね、その上に伏板をかぶせた後、伏板、横板、それぞれを鋸で固定し製作されている。鉄板の固定に使用した鋸間隔は約3.8cmで、伏板頂部には口径1.5mmの穿孔が約1cmの間隔で2個、腰巻板には口径1～1.5mmの穿孔が1～1.5mm間隔で観察された。いたるところに亀裂や空隙がみられ、錆化が進んでいることがわかる（第20図b1）。

刀子は全長が15.9cm、柄部には木質が残存している。ほぼ完形品であるが、いたるところに空隙が認められる（第22図）。

### 5-2 鉄器の化学組成

衝角付冑から摘出した試料片の化学成分分析結果を第4表右欄に示す。T.Feは60.35%で、錆化が進んだ試料である。0.045%のCu、0.010%のNi、0.016%のCoが含有されている。

### 5-3 衝角付冑から摘出した試料片の組織観察結果

摘出した試料にはいたるところに亀裂や空隙がみられる。局所的に金属粒が残存しているものの、そのほとんどは錆によって構成されている（図2a1）。マクロ組織の枠で囲んだ内部には細く伸びる非金属介在物が観察され、EPMAによる分析の結果、FeO-CaO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-K<sub>2</sub>O-MgO-MnO-SiO<sub>2</sub>のガラス質ケイ酸塩（S）であることがわかった（第21図b1・2、第24図）。

## 6 考察

衝角付冑は鋼製の板を素材として製作されている。摘出した試料片は錆化が進んでいたため、錆化前の金属組織を推定できる領域を見いだすことはできなかったが、鋼製の板を曲げて製作されていることを考慮すると、加工・整形が容易な亜共析鋼（炭素量0.8%未満の鋼）が使用されていたものと思われる。残存する非金属介在物はFeO-CaO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-K<sub>2</sub>O-MgO-MnO-SiO<sub>2</sub>のガラス質ケイ酸塩で、鋼製造過程で非金属介在物組成とほぼ同じ組成の鉄滓と鉄とが接触した状態が存在したものと推定される。

第5表には東北地方北部の末期古墳から出土した鉄器の化学成分分析値を示した。古代・中世における鋼製造法には幾つかの方法があった可能性がある。同じ製鉄原料を用いたとしても、生産方法により異なった組成の鋼が製造される。従って、第4表および第5表の分析値を単純に比較し、各鉄器の製作に使用された鋼を分類するうえで有意性のある結果を得ることは難しい。

第4表・第5表に示す12化学成分の中で、Cu、Ni、Coの3成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度メタル中に取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまると推定される。従って、合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。

第23図 a・bは、第4表・第5表の化学成分分析結果から、Ni、Coが100ppm以上含有されている試料片を選別し、(Cu mass%)/(Ni mass%)、(Co mass%)/(Ni mass%)、(Cu mass%)/(Co mass%)、(Ni mass%)/(Co mass%)を求めプロットしたものである。第23図 a・bから明らかなように、上田蝦夷森古墳出土衝角付冑は他の13試料片とは離れた位置に分布する。東北地方北部末期古墳出土鉄器の入手方法については、製品として他地域から搬入、他地域から供給された鉄素材(原料鉄)を使用しての独自製作、原料鉱石からの一貫生産、利用不能となった鉄器の再加工の4つを考えることができる。第23図をふまえると、衝角付冑については、製品としての他地域から搬入、または他地域から供給された鉄素材の加工のいずれかが有力となる。今後、同時代に比定される鉄器製作工房出土鉄塊ならびに末期古墳出土鉄器の金属考古学的調査が進み、その結果との比較・検討がなされれば資料の獲得方法がみえてくるにちがいない。

注 (1) 遺跡の調査・報告に携わられた盛岡市教育委員会からのご教授による。

### 第3表 調査資料

No.	図版番号	資料名	検出遺構	推定時期
1	7図-1	衝角付冑	1号墳主体部底面	7世紀前半から中葉
2	8図-6	刀子		

注) 資料名、検出遺構、推定時期は盛岡市教育委員会による。

第4表 衝角付冑の分析結果

No.	化学成分 (mass%)										ミクロ組織	n.m.i.	Cu, Ni, Co三成分比					
	T.Fe	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Al	Ca			Mg	V	Cu/Ni	Co/Ni	Cu/Co	Ni/Co
1	60.35	0.045	0.011	0.010	0.016	0.046	0.005	0.468	0.005	0.018	0.468	<0.001	no	S	4.34	1.5	2.88	0.66

注) 分析はICP-OES法による。n.m.i.は非金属介入物。Sはガラス質ケイ酸塩。

第5表 古墳出土鉄器の化学組成

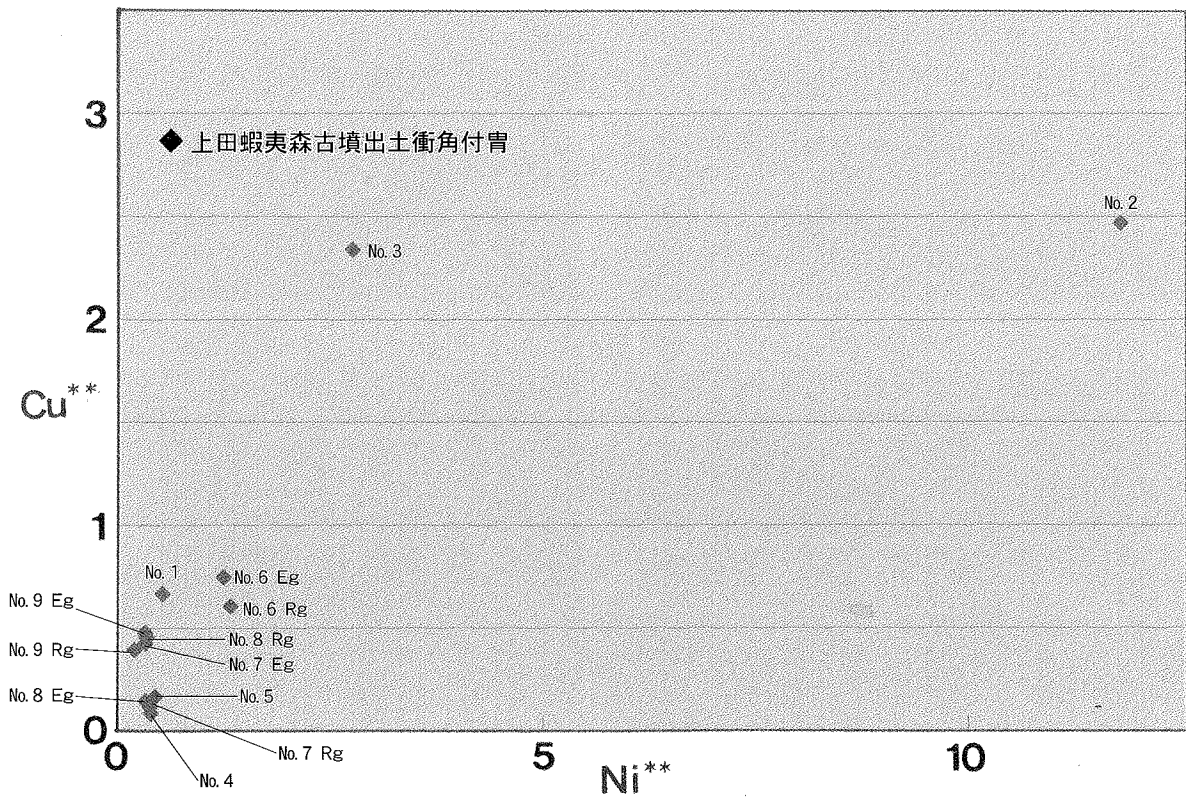
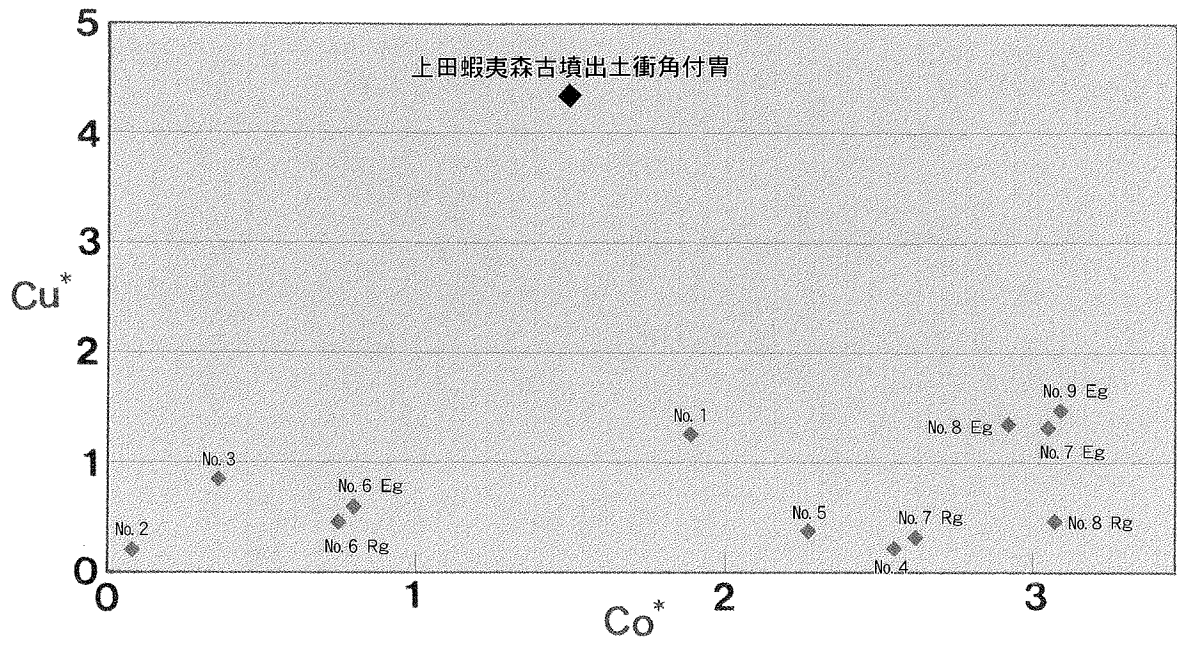
No.	資料名	出土地	化学成分 (mass%)														Cu, Ni, Co三成分比		
			T.Fe	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Al	Ca	Mg	V	Cu/Ni	Co/Ni	Cu/Co	Ni/Co	
1	刀子(No.16)	検出遺構	62.69	0.020	0.007	0.016	0.030	0.208	0.299	0.375	0.053	0.003	0.021	0.004	1.26	1.89	0.67	0.53	
2	刀子(No.12)	5号墳土体部	60.03	0.172	0.008	0.820	0.070	0.067	0.014	0.417	0.080	0.006	0.018	0.003	0.21	0.08	2.47	11.80	
3	直刀2	狹森古墳	89.94	0.089	<0.001	0.105	0.038	0.018	—	—	—	—	—	0.85	0.36	2.34	2.77		
4	直刀3	遺構外	62.69	0.003	<0.001	0.013	0.034	0.044	0.002	0.191	0.013	0.004	0.016	0.22	2.55	0.09	0.39		
5	直刀	浮島古墳 4号墳	98.06	0.006	0.008	0.015	0.034	0.035	0.108	0.077	0.045	0.077	0.023	0.38	2.27	0.17	0.44		
6	方頭太刀Eg Rg	15号墳土体部	62.11	0.009	0.001	0.015	0.012	0.020	0.005	0.675	0.095	0.010	0.009	0.60	0.80	0.75	1.25		
7	直刀Eg Rg	丹後平古墳 7号墳土体部	63.15	0.011	0.010	0.024	0.018	0.010	0.010	0.639	0.005	0.020	0.041	0.46	0.75	0.61	1.33		
8	藤手刀Eg Rg	3号墳土体部	67.38	0.025	0.003	0.019	0.058	0.090	0.032	0.296	0.040	0.020	0.019	1.32	3.05	0.43	0.33		
9	藤手刀Eg Rg	長谷堂遺跡	99.01	0.012	0.002	0.037	0.097	0.180	0.007	0.011	0.002	—	0.007	0.32	2.26	0.12	0.38		
			61.67	0.007	0.006	0.015	0.046	0.040	0.040	1.870	1.070	0.172	0.047	0.47	3.07	0.15	0.33		
			63.95	0.035	0.002	0.026	0.076	0.050	0.004	0.146	0.027	0.007	0.006	1.35	2.92	0.46	0.34		
			55.02	0.019	0.007	0.013	0.040	0.053	0.076	0.764	0.345	0.047	0.028	1.48	3.09	0.48	0.32		
			84.63	0.017	0.003	0.008	0.041	0.026	0.048	<0.001	0.005	<0.001	0.004	—	—	—	0.40	0.20	

注1) Eg, Rgは各資料の刃および棟部を表す。

注2) 分析はICP-OES法による。—は分析せず。

注3) No.1 ~ 4, No.9は新しい試料片によるNi, Coを加えての再分析値。





第23図 衝角付冑に含有される Cu、Ni、Co 三成分比

Cu\* : CuをNiで規格化した値 (Cu/Ni)、Co\* : CoをNiで規格化した値 (Co/Ni)、Cu\*\* : をCoで規格化した値 (Cu/Co)、Co\*\* : NiをCoで規格化した値 (Ni/Co)。No.は表3に対応。

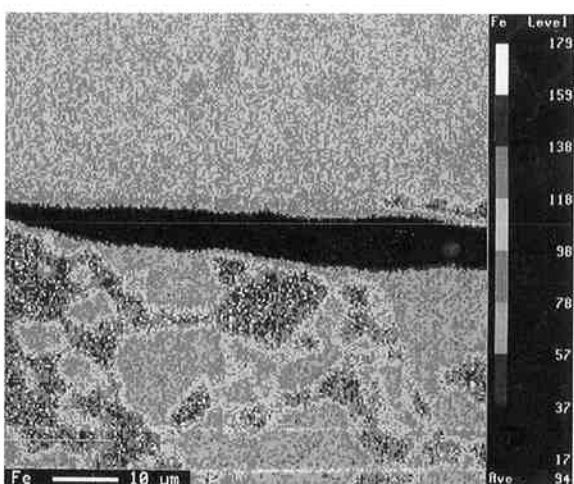
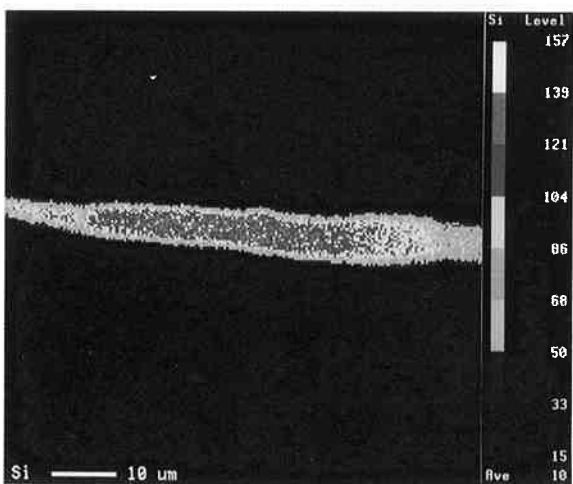
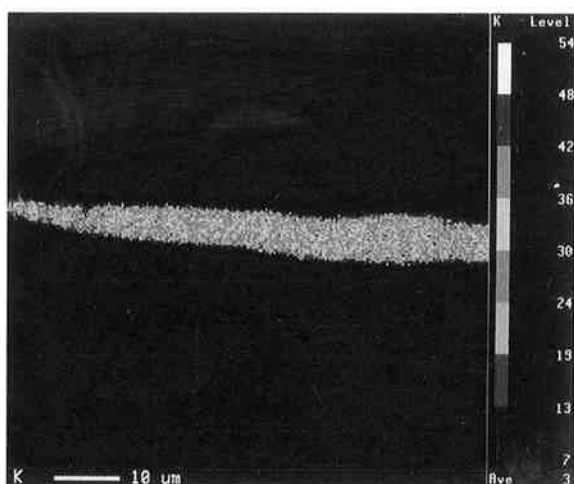
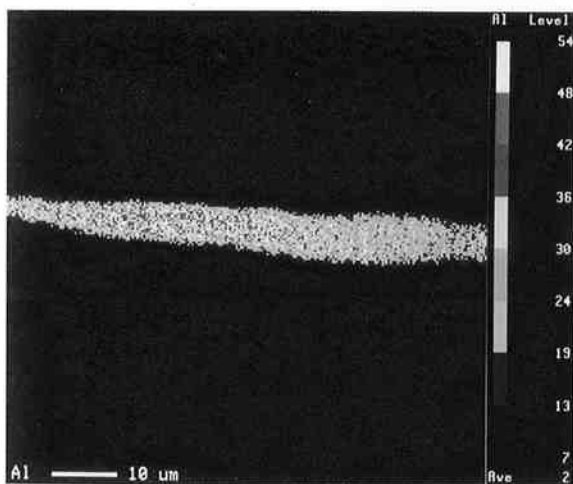
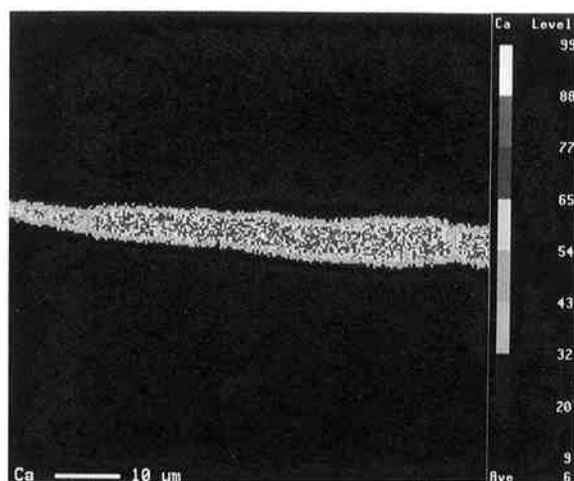
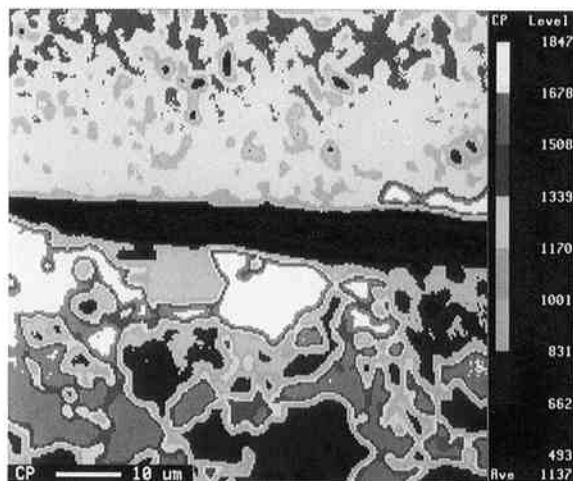


写真1 抽出した試料片に含有される元素濃度分布のカラーマップ  
**第24図** 色が黒⇒青⇒黄⇒赤⇒白の順に含有濃度が高い。



上田蝦夷森古墳群全景 (E→W)



上田蝦夷森古墳群遠景 (S→N)



第1号墳 (E→W)



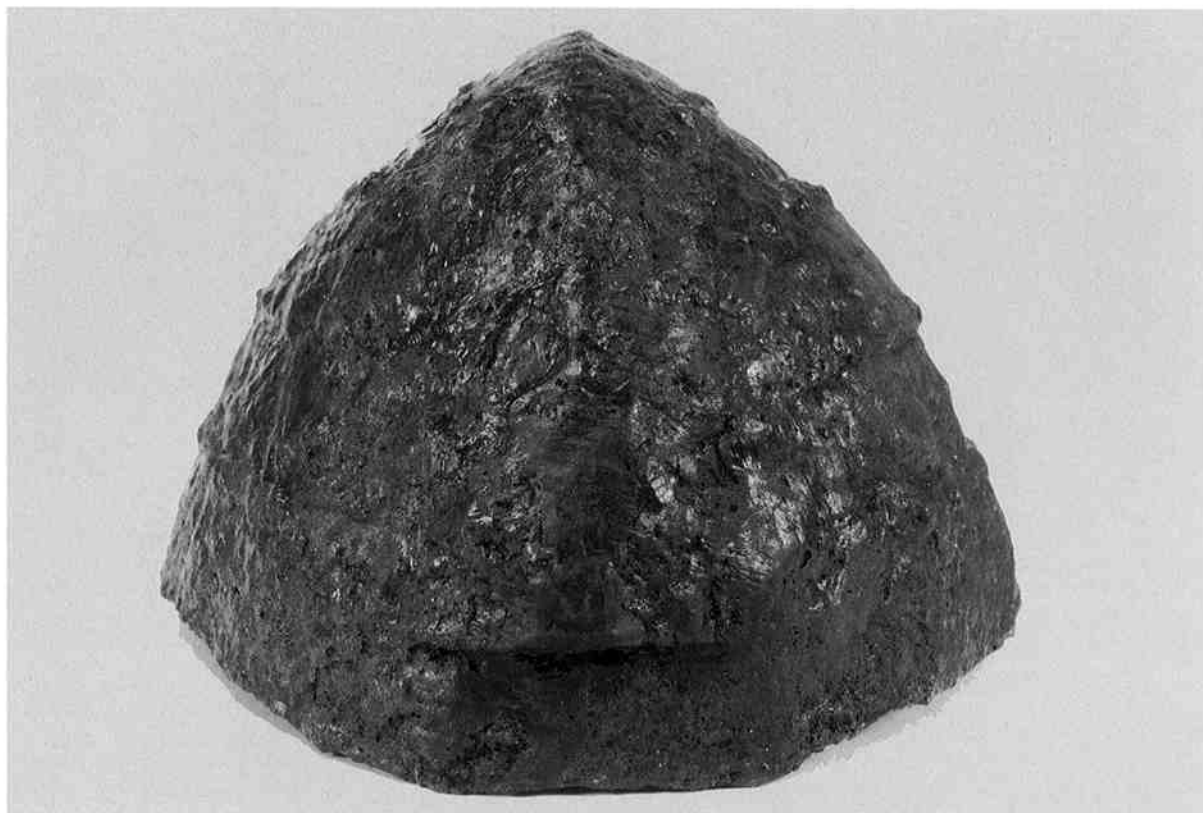
第1号墳主体部



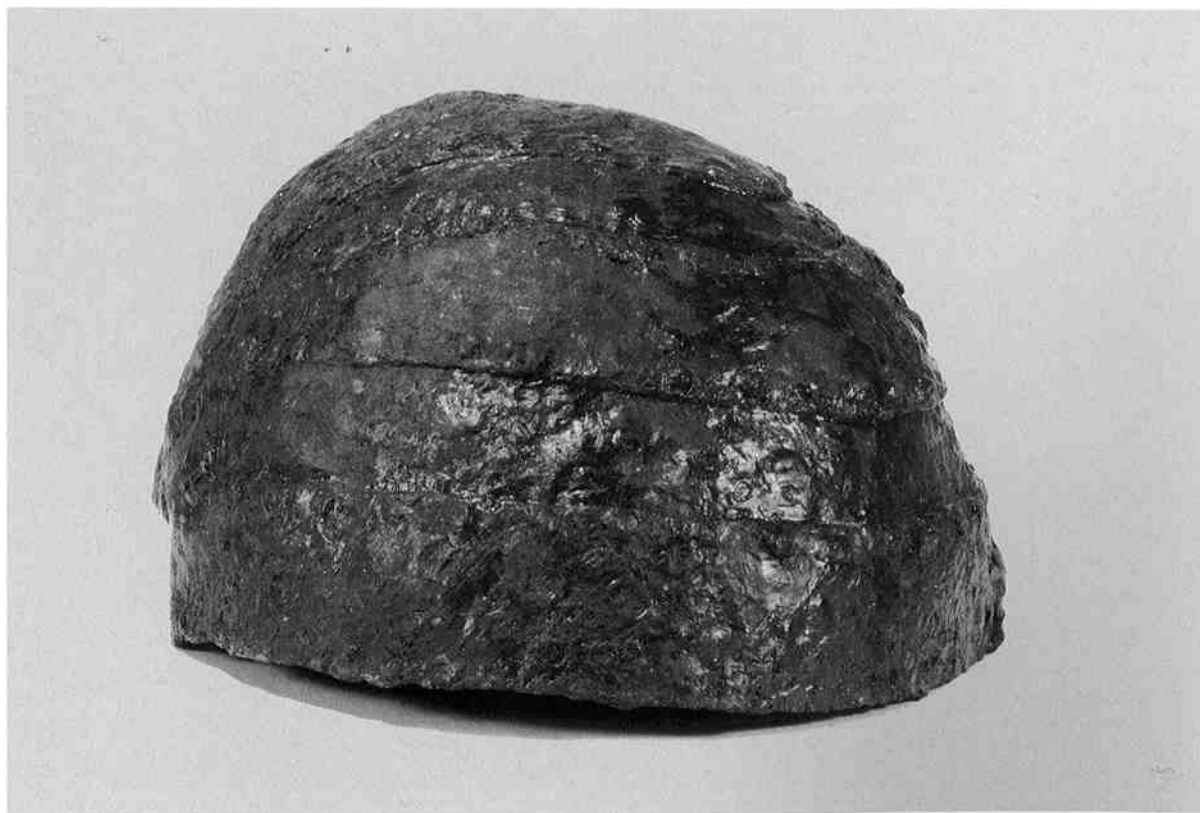
遺物出土状況



出土土器



衝角付冑 正面



衝角付冑 左側面



刀子



環状銅製品



琥珀原石

第 6 図版

太田蝦夷森古墳群  
第 1 号墳



墳丘の状況  
(E→W)



墳丘の状況  
(S→N)



墳丘の表土除去後  
(E→W)



第7図版

太田蝦夷森古墳群  
第1号墳



主体部  
(SW → NE)



主体部  
(SE → NW)



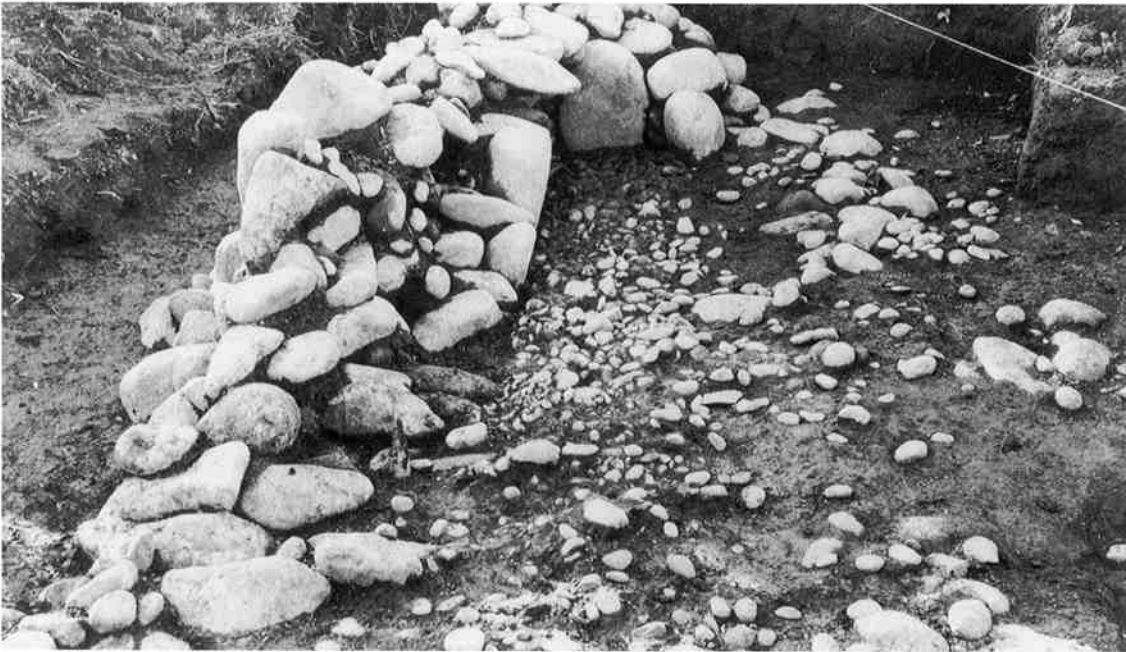
周隍断面

第8図版

太田蝦夷森古墳群  
第2号墳



主体部



主体部



副葬品出土状況

第9図版

3号墳・4号墳



3号墳  
主体部  
露出状況



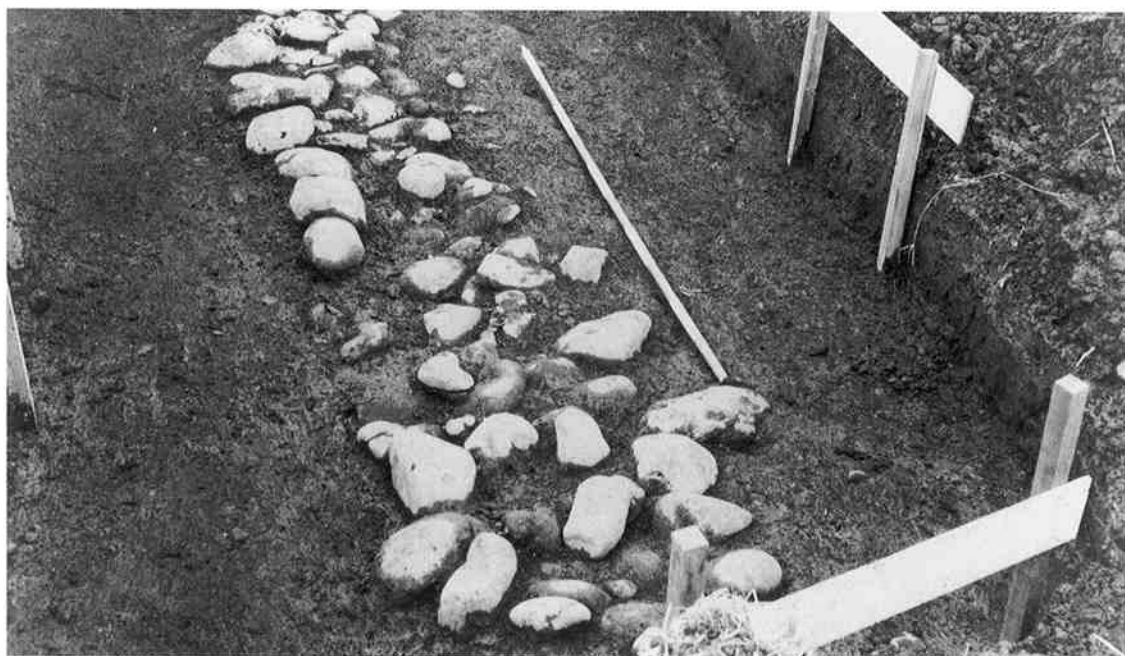
3号墳  
主体部内部



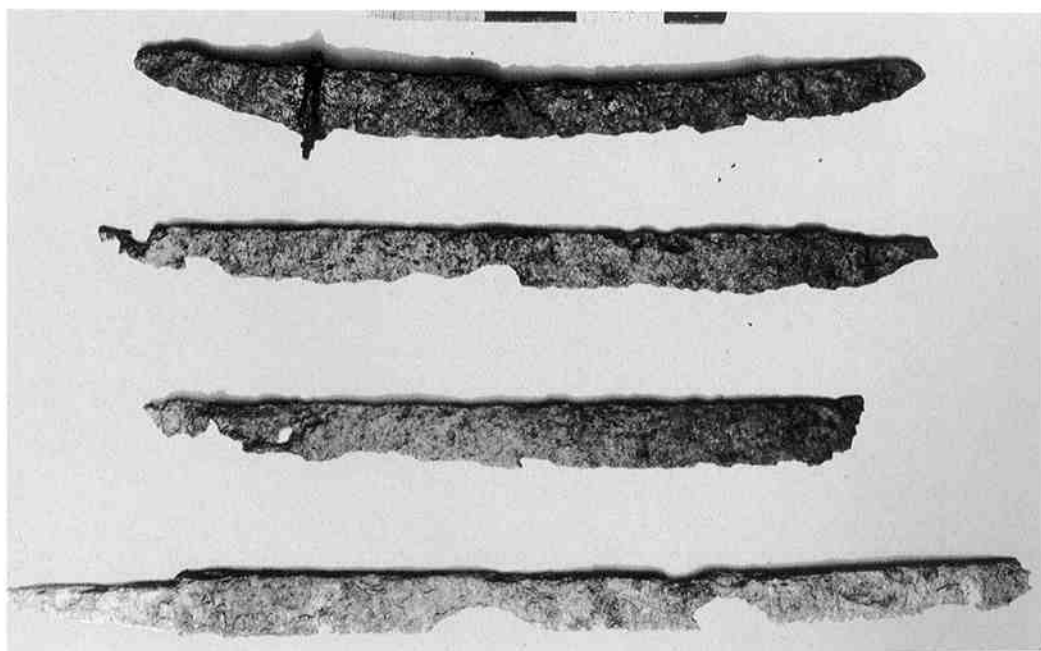
4号墳



第5号墳



第6号墳



古墳群出土  
刀剣(佐々木一男氏所蔵)

## 報告書抄録

ふりがな	うえだえぞもりこふんぐん・おおたえぞもりこふんぐんはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	『上田蝦夷森古墳群・太田蝦夷森古墳群発掘調査報告書』							
副書名								
参次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	室野秀文他							
編集機関	盛岡市教育委員会							
所在地	〒020-0835 岩手県盛岡市津志田第14地割37番地2							
年月日	1997/3/29							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえだえぞもりこふんぐん 上田蝦夷森古墳群	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 ひがしくろいしの 東黒石野 いっちょうめ 一丁目27-36	3201		39° 44′ 17″	141° 09′ 03″	1989.04.13 ～ 1989.06.18	5,877㎡	駐車場 造成
おおたえぞもりこふんぐん 太田蝦夷森古墳群	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 かみおおたあざもりあい 上太田字森合 ・あざえぞもり ・字狄森	3201		39° 41′ 14″	141° 04′ 48″	1955 ～ 1970	—	圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
上田蝦夷森古墳群	古墳	7世紀		古墳1基		衝角付冑・刀子 環状錫製品・ 琥珀原石・ 土師器甕		衝角付冑 最北の出 土例
太田蝦夷森古墳群	古墳	8世紀		古墳7基		直刀・蕨手刀 鍔帯金具・玉類 須恵器・土師器 和銅開珎		

上田蝦夷森古墳群・太田蝦夷森古墳群

発掘調査報告書

1997年3月

発行 〒020-0835 岩手県盛岡市津志田14地割37番地2

盛岡市教育委員会

印刷 〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ3丁目3-28

株式会社 長内印刷